



## 遺産価値総論

「① 自然資源を巧く利用した生活の在り方」、「② 祭祀・儀礼を通じた精緻で複雑な精神性」、「③ 集落の立地と生業との関係の多様性」、「④ 集落形態の変遷」を示す17の考古遺跡で構成される。

構成資産がある北海道と北東北は、山地や丘陵、平地、低地など変化に富んだ地形がある他、内湾や湖、沼、水量が豊富な河川も形成されている。また、冷温帯落葉広葉樹の森林が広がり、海洋では暖流と寒流とが交差することで豊かな漁場が生まれ、サケやマスなどの回遊魚が遡上するなど、恵まれた環境にあった。

一帯からは、重くて壊れやすいため持ち運びに適さない土器が発掘されており、こうした恵まれた環境で食料を安定確保しながら、土器を用いた定住を行っていたことがわかる。墓地・祭祀・儀礼の場である捨て場\*や盛土、環状列石などは、定住開始の初期から精緻かつ複雑な精神文化があったことを示しており、人々は1万年を超す定住生活の中で祖先崇拜や自然崇拜と共に、豊穣への祈念などを行っていた。

本遺産では、こうした縄文時代の定住の歴史を「定住の開始」、「定住の発展」、「定住の成熟」の3段階に分け、その内部をそれぞれ2つに分けた全6つのステージで証明している。

## □ 集落展開及び精神文化に関する6つのステージ

|       | 紀元前1万3000年    | 紀元前7000年                | 紀元前5000年                    | 紀元前3000年                    | 紀元前2000年                                | 紀元前1500年  | 紀元前400年 |
|-------|---------------|-------------------------|-----------------------------|-----------------------------|---|---|---------|
|       | ステージI 定住の開始   | ステージII 定住の発展            | ステージIII 定住の成熟               |                             |   |   |         |
| 集落の展開 | I a<br>居住地の形成 | I b<br>集落の成立            | II a<br>集落施設の多様化            | II b<br>拠点集落の出現             | III a<br>共同の祭祀場と墓地の進出                   | III b<br>祭祀場と墓地の分離                                      |         |
| 構成資産  | •土器の使用を開始     | •居住域と墓域の分離<br>•独特な墓制の成立 | •集落の施設の充実<br>•祭祀場的な捨て場が形成   | •集落の祭祀場が多様となる<br>•祭祀場が顕著となる | •集落は小規模となり分散<br>•集落外に共同の祭祀場と墓地を構築、持続・管理 | •祭祀・儀礼が充実し、共同墓地・共同祭祀場が顕著となる                             |         |
| 気候    | ①大平山元遺跡       | ②垣ノ島遺跡                  | ③北黄金貝塚<br>④田小屋野貝塚<br>⑤ニツ森貝塚 | ⑥三内丸山遺跡<br>⑦大船遺跡<br>⑧御所野遺跡  | ⑨入江貝塚<br>⑩小牧野遺跡<br>⑪伊勢堂岱遺跡<br>⑫大湯環状列石   | ⑬キウス周堤墓群<br>⑭大森脇山遺跡<br>⑮高砂貝塚<br>⑯龜ヶ岡石器時代遺跡<br>⑰是川石器時代遺跡 |         |

北海道・青森県・岩手県・秋田県

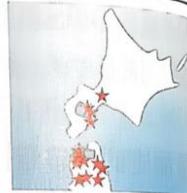


文化遺産

北海道・北東北の縄文遺跡群

Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan

登録年 2021年 登録基準 (iii)(v)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(iii)：

先史時代の人々は、豊かな森林資源や水産資源を持続的に管理することによって採集・漁労・狩猟を基盤とし、約1万5,000年前には土器を使用することによって定住を開始した。その後1万年以上にわたって、農耕文化に移行することなく集落を発展・成熟させた。登録地の遺構と出土品は、採集・漁労・狩猟を生業の基盤とする人々が構築した精緻かつ複雑な精神世界を発展させたことを証明している。

#### ●登録基準(v)：

食料を安定的に確保するため、サケが遡上し、捕獲できる河川の近くや汽水性の貝類を得やすい干潟の近く、あるいはブナやクリの群生地など、集落の選地には多様性が見られ、それぞれの立地に応じて食料を獲得するための技術や道具類も発達した。これらの遺構は、気候変動への適応の仕方、または集落の立地や土地利用の在り方の発展を集落構造の変遷を通じて証明している。

捨て場：食べかすや土器、石器などを捨てた場所で、祭祀や儀礼と関係していると考えられる。

## 歴史

日本列島に大型動物を求めて大陸から人々が南下してきたのは紀元前3万8000年頃で、人々は集団単位で遊動生活を営んでおり、特定の場所に長期間滞在して集落をつくることはなかった。紀元前1万3000年頃に世界規模の温暖化が進むと、紀元前7000年頃に迎えた温暖化のピークで縄文海進\*が進んだ。これにより北海道島南部から北東北では、北方ブナ帯と呼ばれる冷温帯広葉樹の森が広がり、ブナ林が人間の活動領域である平地から海岸線の近くまで広く分布するようになった。森林資源が春や秋の食料確保に大きく貢献する共に、夏や冬などの森林資源が減少する季節には水産資源が利用でき、サケやマスなどの寒流魚が回遊して川を遡上するなど、通年で安定した食料が確保できる環境が整った。

紀元前1万3000年頃から始まる「定住の開始」の時代には、新たな食料資源を利用して列島各地に先駆けて煮沸用の土器が出現した。堅穴建物などの本格的な居住施設はないが、石器製作や調理用の土器の分布範囲から人々が定住を開始したことがわかる。紀元前5000～前2000年頃の「定住の発展」の時代は、住居域や墓域に加えて、定住を安定させるための貯蔵施設や、衛生環境の保持と祭祀のための捨て場がつくられ、集落の構成要素が多様になった。紀元前2000～前400年頃の「定住の成熟」の時代には、集落が小規模化すると共に分散し、これまで生活空間としての利用が少なかった丘陵や山地への進出も行われた。分散化した集落間の結びつきを強め、共通の祭祀や儀礼の拠点となる共同墓地や環状列石などの施設が作られた。

### TOPICS

#### 構成資産の概要

さんいまるやま

#### ▶三内丸山遺跡(青森県青森市) ステージIIb「拠点集落の出現」、特別史跡

堅穴建物や貯蔵施設、大型掘立柱建物、捨て場など、さまざまな施設で構成される大規模な拠点集落で、長期間継続した拠点集落が標高約20mの河岸段丘全体に広がっている。北側には堅穴建物や大型堅穴建物からなる居住域があり、東側に墓域があるなど、エリアがはっきりと分けられている。

列状に配置された墓からなる墓域や、祭祀・儀礼が行われた祭祀場であると考えられることなどから、自然崇拜や祖先崇拜などが継続して行われていたことがわかる。

縄文海進：縄文時代の始まりの頃の温暖化に伴う海水準上昇で、海岸線が内陸に移動した地質現象。

おおゆ

#### ▶大湯環状列石(秋田県鹿角市) ステージIIIa「共同の祭祀場と墓地の進出」、特別史跡

まんざ  
万座環状列石(最大径52m)と野中堂環状列石(最大径44m)の2つの環状列石を中心とする典型的な祭祀遺跡。どちらも川原石を組み合わせた二重の環状構造になっており、それぞれの中心の石と「日時計状組石」が一直線に並ぶ。共同墓地であると共に祭祀・儀礼の空間でもある。また周辺に環状列石がないため、広域にわたる複数の集落によって構築、維持・管理されていたと考えられる。

おおだいやまもと

#### ▶大平山元遺跡(青森県東津軽郡) ステージIa「居住地の形成」、史跡

北東アジア最古の土器が発見された集落遺跡。移動には適さない煮沸用の土器を使用しており、定住が始まったことを示している。石器からは旧石器時代末期の特徴も伺えるが、弓矢の使用開始を示す石鏃\*も発見されている。

いせどうたい

#### ▶伊勢堂岱遺跡(秋田県北秋田市) ステージIIIa「共同の祭祀場と墓地の進出」、史跡

白神山地を望む河岸段丘上に4つの環状列石が隣接して残る。環状列石の周囲からは、土偶や動物形土製品、鐸形土製品、岩版類、三脚石器、石剣類などの祭祀道具も多く発見されており、祭祀・儀礼が行われていたことが分かる。

じゅうていほ

#### ▶キウス周堤臺群(北海道千歳市) ステージIIIb「祭祀場と墓地の分離」、史跡

土手に囲まれた円形の墓地が集中する集団墓地の遺跡。外径30m以上の大きな周堤臺\*が8基集まっている。この大規模な土手をもつ共同墓地は、高い精神性と社会の複雑化を示している。

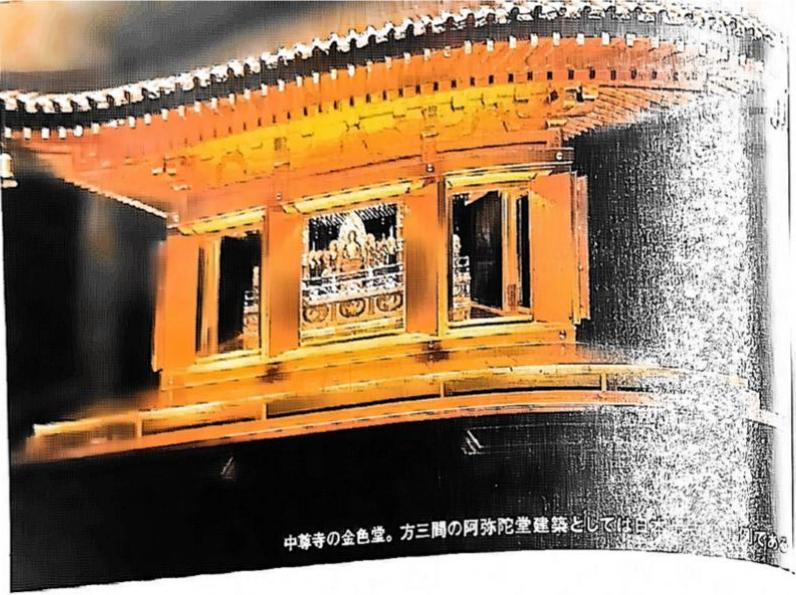
どこうぼ

#### ▶亀ヶ岡石器時代遺跡(青森県つがる市) ステージIIIb「祭祀場と墓地の分離」、史跡

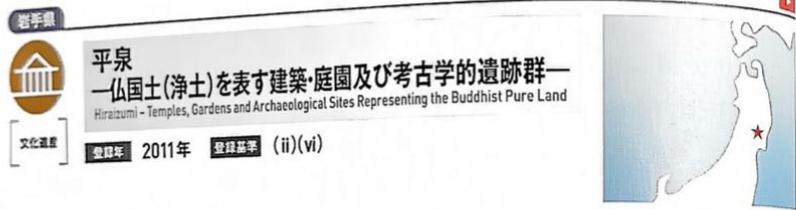
台地上に残る大規模な共同墓地の遺跡。土坑墓が多く集まる墓域が広がり、土器などの供品や玉などの多彩な副葬品が出土しており、一帯が長期間にわたりて構築され、祖先崇拜が継続して行われたことを示している。

台地の周囲の低湿地には祭祀場としての捨て場が形成され、完形品を含む多くの造形的に優れた漆塗りの土器や漆器、土偶、植物製品、ヒスイ製の玉類などが出土した。中でも1887年に出土した眼部の表現が芸術的な「遮光器土偶」は国の重要文化財に指定されている。





中尊寺の金色堂。方三間の阿弥陀堂建築としては日本最古。



## 登録基準の具体的な内容

### ●登録基準(ii) :

6世紀に中国、朝鮮半島を経由して伝來した仏教は、日本古来の自然崇拜と融合しながら独自の発展を遂げた。平泉は、12世紀末の末法思想<sup>\*</sup>の広がりとともに興隆した淨土思想における仏国土(淨土)を、空間的に表現することを目指し築かれた。仏教と共に大陸から伝來した伽藍建築に関する理念や意匠、技術、作庭思想が日本古来の水辺の祭祀場における水景の理念、意匠、技術と融合しながら独自に発展し、広がっていった過程を証明している。

### ●登録基準(vi) :

平泉の造成において重要な意味をもっていた淨土思想は、12世紀における日本の死生觀の形成に重要な役割を果たし、世界でも類を見ない仏国土(淨土)を空間的に表現した建築や庭園群などの理念や意匠などに直接的に反映された。現在も宗教儀礼や民俗芸能といった無形の芸術や芸能のなかに確実に継承されている。

末法思想：釈迦の説いた正しい教えが、時代と共に正しく伝えられなくなり、最後には教えが全く守られない時代が来る、という仏教の考え方。

## 遺産価値総論

8～12世紀の日本で広く普及していた淨土思想は、「死後に仏国土(淨土)に行くことで成仏できる」という考え方で、日本人の死生觀の形成にも多大な影響を及ぼした。淨土思想の宇宙觀の中で、人間が死後にたどり着く場所と考えられていた淨土を、自然の地形と、寺院や庭園設計など日本独自の空間造形を活かしながら現世に再現することを目指した、藤原清衡をはじめとする奥州藤原氏3代によって生み出された景観である。

金鶴山を含む5つの資産で構成される。中尊寺、毛越寺、觀自在王院、無量光院の4つの寺院は、それ自体が仏国土を表現した庭園を備えていた。平泉中央部の西側に位置する金鶴山は、仏国土(淨土)の方角を象徴する意味を持つ聖地とされ、山頂部には經堂などが置かれていた。

これらの資産は、12～13世紀の平泉が、軍事ではなく文化交流に力を注ぐ奥州藤原氏による平和政治のなかで、京都に比肩する最先端都市として著しい発展を見せていたことを物語ると共に、藤原清衡らが抱いた死後に成仏したいという強い願望を今に伝える。

## 歴史

11世紀末、本州最北端の陸奥、及び出羽国を統治していた豪族の藤原清衡は、平泉の地を政治・行政の拠点と定め、新たな都市の建設に着手した。この当時、平泉を含む日本の北方地域と京都を中心とする中央政権との間では、奥州の主要な産出品であった金などによる交易が盛んに行われていた。その財力を背景に、清衡は「淨土思想」の宇宙觀に基づく「現世の仏国土(淨土)」の実現を目指した。

1105年、平泉へと都を移した清衡は中尊寺を造営。1124年にはその境内に金色堂を建立し、阿弥陀如来の仏国土を表現する景観を作り上げた。1128年に清衡が死去すると、その志は2代基衡へと引き継がれ、慈覚大師円仁によって開かれた古寺の毛越寺が再興された。基衡は毛越寺を中心とする区画の計画的な整備を進め



□ 平泉 (印が構成資産)

ちゅうそんじ もうつうじ かんじざいおういん むりょうこういん

中尊寺、毛越寺、觀自在王院、無量光院

た。基衡の死後には、その妻によって毛越寺の東に隣接する観自在王院も建立された。3代秀衡の時代には、北上川に近い平泉館と呼ばれた藤原氏の居館の西に、阿弥陀如来の極楽浄土を表現する寺院である無量光院が造営された。この完成により、政務と生活の場である居館と極楽浄土を表現する寺院が東西に並び立つ景観が完成し、奥州の地にこの世の淨土を築くという清衡の理念は実現した。

1187年、鎌倉幕府を開いた源頼朝の弟である源義経が、兄の追討を逃れ秀衡のもとに身を寄せたが、1189年、4代泰衡は、頼朝の力を恐れ、義経を襲撃し自害へ追込んだ。しかし同年、平泉は頼朝の軍勢に侵攻され、奥州藤原氏は滅亡した。平泉の寺院群は鎌倉幕府の保護下に置かれたが、1226年には毛越寺(円隆寺)が火災で焼失。1337年には中尊寺でも火災が発生し、金色堂と一部の經蔵を除く多くの建造物が焼失した。

室町時代になると平泉の寺院群は、参詣の靈場として一般の庶民からの信仰も集めるようになり、再び繁栄期を迎えた。中尊寺の参道である月見坂が整備された江戸時代以降は、俳人の松尾芭蕉はじめ、多くの文人墨客がこの地を訪れた。



藤原清衡(上)・基衡(右)・秀衡(左)

## TOPICS 構成資産の概要

### ▶ 中尊寺

藤原清衡が平泉を造営する際に建立した寺院。1126年の建立に関わる『供養願文』には、奥州の戦で亡くなった人の靈を敵方の区別なく淨土へと導くと共に、辺境とされた奥州の地に現世の仏国土(淨土)を築こうとした清衡の強い願いが示されている。

### ▶ 金色堂

1124年に清衡が中尊寺境内の北西側に建立した阿弥陀堂。阿弥陀如来の仏国土(淨土)を表す方三間<sup>ほうさんげん</sup>の仏堂建築は、同形式の阿弥陀堂建築の中では国内最古のもの。中尊寺では唯一現存する創建当時の建造物で、堂内の内陣には藤原氏3代の遺体と、4代泰衡の首級を納めた3つの須弥壇がある。

方三間：伝統的な日本建築の1つで、正方形(方)の一辺に柱が4本あり、柱の間が3つある(三間)ということ。寸法の「間」とは異なる。

### ▶ 毛越寺

2代基衡が造営した寺院。度重なる災禍で現在はほとんどの建造物が失われたが、かつては40にも及ぶ堂宇と500に上る禅坊が存在したとされる。堂宇の南側には大きな園池が広がり、北東側に設けられた造水<sup>やりみず</sup>\*は平安時代の遺構としては日本で唯一のもの。堂宇と周囲の景観と共に、おもに薬師如来の仏国土(淨土)を表す淨土庭園が造成されている。



### ▶ 観自在王院跡

2代基衡の妻によって建立された寺院。毛越寺の東に隣接して広がる境内にあった伽藍は1573年に焼失。大小の阿弥陀堂が林立していた庭園は、園池を中心とする淨土庭園で、背後の金鶴山と一体となった景観によって阿弥陀如来の極楽浄土を表現していた。

### ▶ 無量光院跡

3代秀衡が12世紀後半に建立した寺院の跡。金鶴山の東に位置し、その東には居館の遺跡である柳之御所遺跡がある。阿弥陀堂は、宇治の平等院阿弥陀堂(鳳凰堂)をモデルとし、平等院からさらに発展した仏堂・庭園の伽藍配置を持つ寺院であった。東側から西側の仏堂を望むと、年に2回、4月と8月に仏堂背後の金鶴山山頂に夕日が落ち、建物全体が後光によって光り輝くように見える。これは、無量光院が現世における西方極楽浄土の観想を目的としてつくられたためである。



再現図

### ▶ 金鶴山

平泉中心部の西に位置する標高98.6mの小丘。平泉中心部から目視できる位置にあるため、古くから方位を示す印とされ、居館などを築く際にその位置関係が重視された。山頂には經塚が築かれ、各寺院の淨土庭園によって、仏国土(淨土)を空間的に表現する際に重要な役割を担っていた。

造水：庭園などに水を導き入れるために作られた流れ。



栃木県



## 日光の社寺

Shrines and Temples of Nikko

文化遺産

登録年 1999年 登録基準 (i)(iv)(vi)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(i)：

日光の二社一寺に残るそれぞれの建造物は、天才的な芸術家の手による作品であり、高い芸術性をもつ。

#### ●登録基準(iv)：

東照宮、輪王寺大歓院は、日本の権現造り様式を完成させた建造物であり、その後の靈廟建築や神社建築の規範となった。日光の建造物や装飾には、全体で統一的表現を生み出すための配置や彩色効果が取り入れられ、優れた建築景観をつくり上げている。とくに東照宮の建造物群は、日本古来の建築様式の形態を知る上でも重要な見本である。**神格化された自然環境を背景に、その前面の傾斜面に社殿を位置する配置**は、日本の神社における代表的な景観構成のあり方を示している。

#### ●登録基準(vi)：

日光は、徳川家康の靈廟である東照宮がある、江戸時代を代表する史跡の一つ。この地域の建造物群は神道や仏教の特質を表し、周囲の自然環境と一体となって

くり上げられる景観は、日本の宗教空間を受け継ぐ独自の神道思想と密接に関連する顕著な例である。

### 遺産の概要

修験道の高僧である**勝道上人**が日光山を開山した8世紀末以来、約1,200年にわたる歴史のなかで発展してきた日本有数の靈場である。世界遺産には、「東照宮」「二荒山神社」「輪王寺」の二社一寺に属する建造物103棟が登録されている。

古くから山岳信仰の聖地となっていた自然景観が広がるこの地域には、神道や仏教、そして江戸幕府の開祖である徳川家康の墓所など、さまざまな宗教や信仰形態が複合した多くの建造物が現存する。神道と仏教が融合した「神仏習合」の思想をはじめ、山岳信仰と仏教が結びついて生み出された修験道や、亡くなった偉人を神として祀る「人物神」など、日本特有のさまざまな信仰形態の歴史を物語ると共に、それらが混在した宗教的靈地として発展してきた日光の歴史を知る上で重要である。

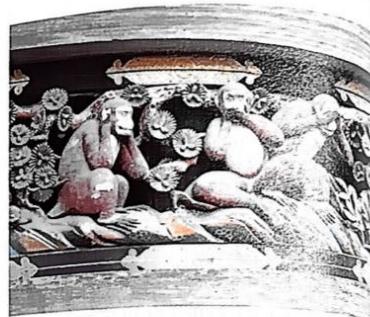
### 歴史

日光山の周辺は、古くからの山岳信仰の聖地であり、仏教徒などによる修行の場とされてきた。782年に男体山に登頂した勝道上人が、その2年後に寺院を建立し日光山を開山した。以後、日光山周辺は、日本古来の神道と仏教思想が融合した「山岳信仰」の聖地として発展し、その伝統は二荒山神社や輪王寺へと継承された。12世紀には堂社の創建が盛んに行われ、靈山としての整備が進んでいった。鎌倉時代には、日光は関東の鎮護となった源頼朝をはじめとする歴代將軍からの崇敬を集め、日光は徳川家康の靈廟である東照宮がある、江戸時代を代表する史跡の一つ。この地域の建造物群は神道や仏教の特質を表し、周囲の自然環境と一体となって



□ 日光の社寺

江戸時代に入ると、初代將軍徳川家康の側近であった僧の天海が、日光山の南に着手し、建造物の修繕などを積極的に行つた。1616年に徳川家康が病没すると、その遺体は日光に葬られ、翌年にはその靈廟である「東照社」<sup>\*</sup>が造営された。<sup>3</sup>将軍の徳川家光の下、幕府の政情が安定期を迎えた1634～1636年に、「寛永の大造替」と呼ばれる大改修が実施され、現在のような権現造りを主体とする東照宮の姿が完成した。江戸時代には、東照宮を含む山中の社寺は一体のものと考えられており、二荒山神社や輪王寺でも古い寺社の再建や再興、新建造物の造営などが行われていた。明治に入ると、政府によつて布告された「神仏分離令」によって、日光山周辺の社寺は「二社一寺」に分離され、いくつかの建造物が移設された。



神厩舎の三猿

## TOPICS 構成資産の概要

### ▶ 東照宮

1617年に創建された徳川家康の靈廟で、現存するほとんどの建物は1636年に建て替えられたもの。本殿と拝殿の間を石の間で結ぶ東照宮本社に見られる様式は、「権現造」<sup>\*</sup>の完成形とされる。構成資産には国宝8棟のほか、重要文化財34棟が含まれている。

### ▶ 二荒山神社

「二荒山大神」とも総称される大己貴命、田心姫命、味耜高彦根命を祭神とする。日光における山岳信仰が隆盛期を迎えた中世以降、その中心地として整備され、東照宮の造営に伴い1619年から本殿をはじめとする諸社殿が造営された。このうちの23棟が重要文化財に指定されている。



東照社：1645年に朝廷から宮号が授与され、東照宮と改称した。 権現造：徳川家康の諱号が「東照大権現」であったことに由来する。

### ▶ 輪王寺

766年に勝道上人が創建した「四本龍寺」を起源とする寺院。本堂（三仏堂）にまつられる千手觀音、阿彌陀如来、馬頭觀音は、「仏や菩薩が神に姿を変えて現れる」とする神仏習合の基本理念（本地垂迹説）では、それぞれ二荒山大神（大己貴命、田心姫命、味耜高彦根命）と同一の存在と考えられている。徳川家光の廟所の大猷院や天海をまつる慈眼堂がある。



## TOPICS 具体的な遺産価値

### ▶ 権現造

横長の拝殿と本殿の間を石の間でつなぎ一棟の建物とするもの。東照宮本社では、山の斜面を活かし、一番奥に位置する本殿の床を拝殿より高くする造りになっている。一方、輪王寺大猷院では石の間を「相の間」と称し、拝殿と相の間の高さは同じである。

### ▶ 陽明門

1636年に建造された東照宮を代表する建造物。高さ約11m、横幅約7m、奥行約4mの建物全体が装飾彫刻や文様で埋め尽くされている。一枚10.9cmの正方形の金箔が約24万枚も貼られ、龍や龍馬、鳳凰などの想像上の動物や、古代中国に由来する故事や聖人などをかたどった508もの精緻な彫刻が装飾されている。1654年に創建当時の「檜皮葺」から改められた「銅瓦葺」の屋根など、当時としては先進的な防火技術が施されている。



### ▶ 八棟造

「寛永の大造替」の以前から残る数少ない建造物の1つである二荒山神社の本社本殿には、神社建築様式の1つ「八棟造」が取り入れられている。京都の「北野天満宮」などで見られる様式で、入母屋造りの屋根や破風、向拝<sup>\*</sup>などが複雑に入り組んだ構造、本殿と拝殿の間を石の間でつなぐ配置などは、後の権現造の原型となつた。

向拝：佛堂や社殿の屋根の、前方に張り出した中央の部分。階段の上に設けられることが多い。



群馬県  
富岡製糸場と絹産業遺産群  
Tomioka Silk Mill and Related Sites  
文化遺産 登録年 2014年 登録基準 (ii)(iv)

### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(ii) :

富岡製糸場は、産業としての養蚕技術がフランスから明治維新後の早い時期の日本に、完全な形で移転されていたことを示す遺産である。長年にわたる養蚕の伝統を背景に行われたこの技術移転は、養蚕の伝統そのものを抜本的に刷新した。富岡はその技術改良の拠点となり、20世紀初頭の世界の生糸市場における日本の役割を証明するモデルとなった。これは、世界的に共有された養蚕法が、早い時期に確立されていたことを証明している。

#### ●登録基準(iv) :

富岡製糸場と絹産業遺産群は、生糸の大量生産のための一貫した全行程の優れた見本である。設計段階から工場を大規模なものにしたことと、西洋の最良の技術を計画的に採用したことは、日本と東アジアに新たな産業の方法論が伝播するのに最もふさわしい時期だったことを示している。19世紀後半の大きな建築物群は、木骨レンガ造など和洋折衷という日本特有の産業建築様式の出現を示す卓越した事例である。

### 遺産価値総論

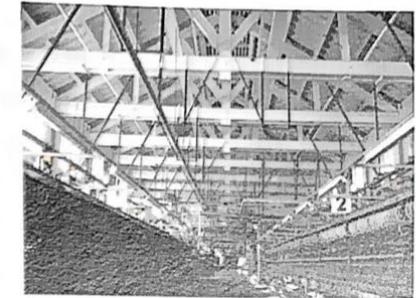
『富岡製糸場と絹産業遺産群』は、貿易を通じた世界経済の一体化が進んだ19世紀後半から20世紀にかけて起こった世界的な技術交流と技術革新の歴史を物語る産業遺産である。19世紀後半、江戸時代の鎖国政策のため近代化が大幅に遅れていた日本では、明治維新を契機に近代国家の仲間入りをすることが喫緊の課題となっていた。明治政府は、江戸時代末期から海外にも広く輸出されていた生糸を軸に貿易の拡大を目指すと共に、従来の伝統的養蚕技術に代わる海外の器械製糸技術の導入を模索していた。

こうした状況のなか、1872年にフランスから招聘した技術者、ホール・ブリュクの指導の下、初の官営器械製糸場である富岡製糸場が完成。フランスから富岡へと伝えられた器械製糸技術とその手法は、日本各地に広められると共に、伝統技術との融合のなかで独自の改良も加えられていった。その成果は生糸の品質向上と大量生産を実現すると共に、日本の絹産業の近代化を大きく牽引した。

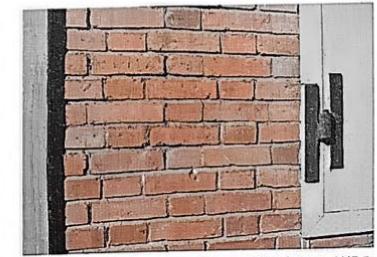
今も創建時の姿を残す富岡製糸場は、西欧の技術と日本の技術が融合した和洋折衷の建造物群である。製糸場の繭倉庫や繰糸場は、日本古来の木造の柱に西欧伝来のレンガを組み合わせた木骨レンガ造と呼ばれる構造でつくられており、柱の少ない広い工場空間を確保するため三角形を基本としたトラス構造の屋根組みも見られる。世界遺産にはこの製糸場のほか、絹産業の発展の中で大きな役割を果たした「田島弥平旧宅」「高山社跡」「荒船風穴」の合計4資産が登録されている。

### 歴史

紀元前の中国で生まれた絹とその生産技術は、その後日本にも伝えられ、各地で伝統的な養蚕・製糸技術が育まれてきた。江戸時代末期になると、日本の生糸は海外にも輸出されていたが、鎖国のために近代技術の導入が遅れたことに加え、伝統的な製糸技術だけでは輸出にともなう急速な需要拡大に対応できな



柱の少ない製糸場内部



短辺と長辺を組み合わせる「フランス積み」のレンガ組み

かつたことから、生糸の品質は著しく低下し、輸入国からの評判も下がっていた。明治維新後、西洋列強と対等な立場を目指す明治政府は、「富國強兵・殖産興業」に重点を置き、主要輸出品の1つに生糸を定めた。さらなる貿易拡大を実現するためには、生糸の品質向上と大量生産を可能にする新たな技術の導入が不可欠と考えた明治政府は、当時、製糸業を基幹産業としていたフランスから技術移転を図った。招聘されたポール・ブリュナは、原料となる繭が入手しやすい地域の調査に取り組み、伝統的に養蚕が盛んで土地も広く、さらに製糸業に欠かせない水も豊富に確保できる富岡を製糸場建設の地に定めた。この資材となる窓ガラスや蝶番はフランスから輸入され、石や木材などは群馬県内で調達された。壁などに使用されるレンガはブリュナ自身の指導下、日本の瓦職人によって製造された。建設工事は1871年に起工し、翌年の1872年、日本初の官営工場である富岡製糸場が完成し、操業を開始した。

明治政府は富岡製糸場の建設と並行して、全国各地で労働力となる工女の募集を行った。当時は外国人指導者の下で働くことに抵抗を感じる日本人も多く、募集活動は難航したが、各府県に人数を割り当て、士族の子女を中心に多くの人材が集められた。富岡製糸場の操業と共に生糸生産に取り組んだ工女の多くは、のちに器用な指導者となり、習得した技術を日本各地に広めていった。

富岡製糸場の周辺地域では、良質な繭を大量に確保するための「繭の改良運動」が展開されており、養蚕農家(蚕種製造)の田島家や、養蚕教育研究機関の高山社、蚕種貯蔵の荒船風穴などによって、試験飼育や蚕種製造、飼育指導、蚕種貯蔵といった優良品種の開発や普及に向けた取り組みが推進された。

1893年、富岡製糸場は三井家に払い下げられ、官営工場としての歴史は幕を閉じた。その後も、製糸場は別の民間の事業者へと引き継がれたが、化学繊維などの普及による生糸価格の下落などのため、1987年に操業を停止した。

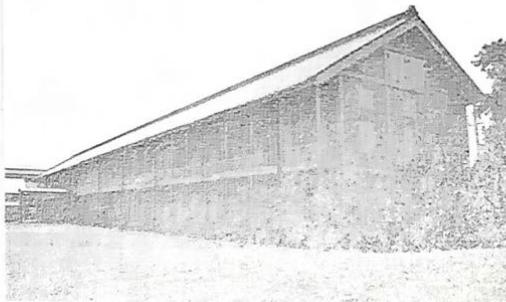


水を溜めておく国内最古の鉄水溜(鉄水槽)

## TOPICS 構成資産の概要

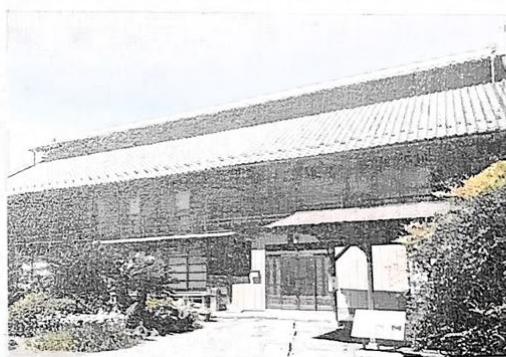
### ▶ 富岡製糸場

1872年に明治政府が設立した官営の器械製糸場。和と洋の建築技術の融合が見られる繭倉庫や繭糸場などが、ほぼ建設当時のままの姿で残る。官営から民営に変わったのちも一貫して操業され、製糸技術開発の最先端として国内養蚕・製糸業を世界一の水準に引き上げた。



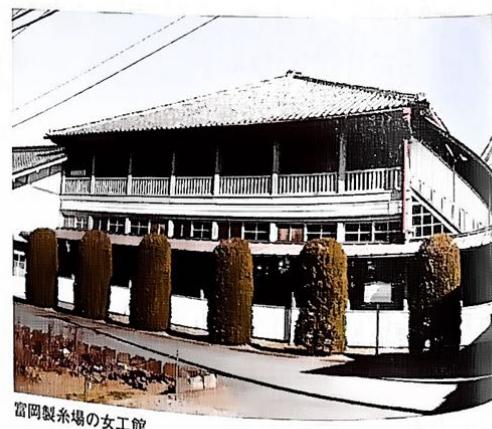
### ▶ 田島弥平旧宅

通風を重視した蚕の飼育法「清涼育」を確立した養蚕農家の田島弥平によって、1863年に建造された主屋兼蚕室。瓦葺きの総2階建て。換気のための「通風孔」を備えた構造は、のちに近代養蚕農家の原型となった。国史跡に指定。



### ▶ 高山社跡

通風と温度管理を調和させた「清温育」という蚕の飼育法を確立した高山長五郎の生家。養蚕教育機関である高山社の設立後は、養蚕法の研究・改良や組合員への指導が行われた。指導のなかで育まれた技術は、国内はもちろん海外にも伝えられ、「清温育」は日本の標準養蚕法となった。



富岡製糸場の女工館

### ▶ 荒船風穴

1905年に建造された、岩の隙間から吹き出す冷風を利用した国内最大規模の蚕種(蚕の卵)の貯蔵施設。冷蔵技術を活かし、当時は年1回(春蚕中心)だった養蚕を複数回可能にし、繭の大幅な増産に大きく貢献した。現在も当時と変わらぬ冷風環境が維持されている設備は、国史跡に指定されている。



外壁はモジュロールによって決められた大小さまざまな長方形で囲われる。

アルゼンチン共和国 インド スイス連邦 ドイツ連邦共和国／日本／フランス共和国／ベルギー王国

**ル・コルビュジエの建築作品：**  
近代建築運動への顕著な貢献  
The Architectural Work of Le Corbusier, an Outstanding Contribution to the Modern Movement

文化遺産 登録年 2016年 登録基準 (i)(ii)(vi)

### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(i)：

ル・コルビュジエの建築作品は、人類の創造的才能を示す傑作であり、建築及び社会における20世紀の根源的な諸課題に対して際立った答えを与えていた。

#### ●登録基準(ii)：

ル・コルビュジエの建築作品は、近代建築運動の誕生と発展に関連して、半世紀以上にわたる地球規模での人間の価値の交流という、前例のない事象を示している。彼は他に例を見ない先駆的なやり方で、過去と決別した新しい建築的言語を開拓することで、建築に革命を起こした。ル・コルビュジエの建築作品が4大陸において与えた地球規模の影響は、建築史上例のないものである。

#### ●登録基準(vi)：

ル・コルビュジエの作品は、「近代建築運動」という顕著な普遍的価値を有する思想と直接的かつ物質的に関連している。彼の作品は、建築的言語を刷新し、建築技術の近代化を促した。また彼の作品は、近代人の社会的・人間的欲求への答えでもある。

### 遺産の概要

パリを拠点に活躍した建築家ル・コルビュジエの建築作品を1つの世界遺産として登録している。フランスやスイス、アルゼンチン、インド、ドイツ、ベルギー、日本の7カ国に点在する17の資産で構成されており、日本からは東京の上野にある「国立西洋美術館」が含まれている。構成資産は、20世紀を代表する建築家であるル・コルビュジエの近代建築の概念が、全世界規模に広がり実践されたことを証明している。「ル・コルビュジエの建築作品」のように、共通の特徴や背景をもつ構成資産を1つの世界遺産として登録する「シリアル・ノミネーション・サイト」が国境をまたいで存在している場合、「トランスバウンダー・サイト」と呼ばれる。「ル・コルビュジエの建築作品」は、日本で初めての「トランスバウンダー・サイト」である。また、構成資産が複数の大陸にまたがる「トランスコンチネンタル・サイト」としては、世界初の登録になる。

ル・コルビュジエは合理的、機能的で明晰なデザイン原理を追求し、20世紀の建築や都市計画に多大な影響を与えた。彼は「**近代建築の五原則**」や「モジュロール」、「ドミノ・システム」など、現在の近代建築の基礎となる重要な概念を次々と打ち出し、過去の伝統的な建築からの決別を図った。特に「①ピロティ、②水平連続窓、③屋上庭園、④自由な平面、⑤自由なファサード」からなる「近代建築の五原則」は世界的に大きな影響を与えた。この「近代建築の五原則」の完成形ともいえるのが、1928年に設計された「**サヴォア邸**」である。

五原則の1つ「ピロティ」とは、フランス語で「杭」を意味する言葉。「サヴォア邸」のように建物の1階部分の柱で建物を支えることで、空中に浮いたような軽やかな印象を与える。西洋建築では従来、壁によって建物を支えてきたがル・コルビュジエは発想を転換し、柱によって床面を支える建築構造を推進した。これによって壁の面積を減らすことができ、デザインの自由が高まり、水平連続窓や自由な平面などが可能となった。ピロティは「国立西洋美術館」でも見ることができる。



フランスのサヴォア邸

「国立西洋美術館」には「無限成長美術館」という概念も用いられている。美術館を訪れた客が、中心から渦巻状に移動しながら展示室を鑑賞するだけでなく、将来的に展示作品が増えれば螺旋状に展示室を外側に増設して広げてゆくことが考えられた。また、美術館としては珍しく、自然光を取り込むための窓や照明ギャラリー(現在は蛍光灯が入れられている)がつくられた。1996年には、巨大地震に 対応するための免震工事が行われた。工事に際しては、国立西洋美術館の建物自体の文化財的価値が高いため、建物本体には手を加えず、地下の基礎部分に免震装置が取り付けられた。免震工事は屋外の彫刻品1つ1つにも施されている。

歴史

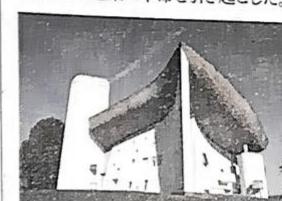
ル・コルビュジエは1887年にスイスのラ・ショー・ド・フォン<sup>\*</sup>で生まれた。父親の家業である時計製造の仕事を継ぐため、美術学校で彫刻や彫金を学んだ。在学中に建築を学ぶことを勧められ、建築家としての人生の一歩を踏み出した。1917年に活動の拠点をフランスのパリに移し、数々の建築作品をつくり上げ、世界中に名を馳せた。ル・コルビュジエのアトリエには世界中から建築を志す多くの者が訪れた。日本からは前川國男、坂倉準三、吉阪隆正の3人が、「日本の3大弟子」として、日本の近代建築に大きな功績を残した。

「国立西洋美術館」は実業家であった松方幸次郎が20世紀初頭にヨーロッパで買付けた美術作品群、「松方コレクション」を展示するために1959年に建てられた。ル・コルビュジエが基本設計を行い、前川國男と坂倉準三、吉阪隆正の3人の弟子が実施設計を担当した。設計を依頼されたル・コルビュジエは、1955年に8日間、日本に滞在し建設予定地などを視察し、その後、パリに戻り設計図を書き上げた。しかし、その設計図には建築に必要な数値が全く書かれていたため、前川國男と坂倉準三、吉阪隆正らが図面を基にして、建築のための実施設計を行った。



ラ・ショー・ド・フォン：スイスの世界遺産「ラ・ショー・ド・フォン／ル・ロクリ、時計製造都市の街並み」に登録されている。41

TOPICS

| 設計決定年  |  |
|--------|--|
| 1923年  | ラ・ロッシュ・ジャンヌレ邸(フランス)  |
| 1923年  | レマン湖畔の小さな家(スイス)  |
| 1924年  | ペサックの集合住宅(フランス)  |
| 1926年  | ギエット邸(ベルギー)  |
| 1927年  | ヴァイセンホフ・ジードルングの住宅(ドイツ)   |
| 1928年  | サヴォア邸と庭師小屋(フランス)   |
|        | ピロティや自由な平面、屋上庭園といった近代建築の五原則をすべて満たす、この時代のル・コルビュジエの代表作。  |
| 1930年  | イムーブル・クラルテ(スイス)  |
| 1931年  | ポルト・モリトーの集合住宅(フランス)  |
| 1945年  | マルセイユのユニテ・ダビタシオン(フランス)<br>ル・コルビュジエの都市理論「輝く都市」を具現化した8階建ての集合住宅。第二次世界大戦後、悪化したヨーロッパの住宅事情に対応して開発された。規格化された23種類の住居ユニットをブロックのように組み合わせた337戸からなり約1,600人が居住することができる。 |
|        |   |
| 1946年  | サン・ディエの工場(フランス)  |
| 1949年  | クルchetト邸(アルゼンチン)   |
|        | ロンシャンの礼拝堂(フランス)<br>合理性を求めた建築五原則から離れ、デザインと空間の自由を追求した後期ル・コルビュジエの代表作。彫刻的な造形はル・コルビュジエの他の作品に似ておらず20世紀の宗教建築に革命を引き起こした。   |
| 1950年  |   |
| 1951年  | カップ・マルタンの休暇小屋(フランス)  |
| 1952年  | チャンディガールのキャピトル・コンプレックス(インド)  |
| 1953年  | ラトゥーレットの修道院(フランス)  |
| ~1965年 | フィルミニの文化の家(フランス)   |
| 1955年  | 国立西洋美術館(日本)  |



ル・コルビュジエの建築作品:近代建築運動への顕著な貢献(★が構成資産)



火口には浅間大神が宿すとされる

静岡県・山梨県



## 富士山—信仰の対象と芸術の源泉

Fujisan, sacred place and source of artistic inspiration

文化遺産

登録年 2013年 登録基準 (iii)(vi)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(iii)：

富士山の周辺地域では、古くから富士山を「神仏の居処」とする山岳信仰に基づき、火山との共生と共に山麓の湧水などにも感謝するという独自の伝統が育まれてきた。その伝統は、時代を超えて富士登山や巡礼の形式などのなかに受け継がれた。富士山とその信仰から生み出された多様な文化資産は、今なお生きる山岳信仰や文化的伝統を伝える、類のない例である。

#### ●登録基準(vi)：

富士山は、日本の最高峰であると共に、円錐形をなす独立成層火山としての莊厳な姿から、日本固有の詩歌や文学作品にも描かれるなど、古くからさまざまな芸術活動の母体となってきた。19世紀には浮世絵に描かれた富士山の姿が近現代の西洋美術のモチーフとなり、西洋の数多くの芸術作品に影響を及ぼすと共に、日本や日本文化を象徴する記号として広く海外にも定着した。

### 遺産価値総論

日本の最高峰である富士山(3,776m)の南側の山麓は、駿河湾の海岸にまで及んでおり、海から山頂まで傾斜面が連なる成層火山としては、世界有数の高さを誇る。世界遺産には、富士山域を中心に、25の構成資産が登録された。

富士山では、山頂や山域、山麓での修行や巡礼を通じて、神仏の靈力を獲得し、「**擬死再生**」を成しとげようとする独自の文化的伝統が育まれてきた。この信仰と伝統は、現在の富士登山の形式などにも継承されている。活発な火山活動によって噴火を繰り返す富士山に対する畏敬の念は、日本古来の神道思想と結びつき、火山を含む自然との共生を重視する独自の伝統も育んだ。その思想は、美しい山容を誇る富士山を敬愛し、山麓の湧き水などにも感謝する伝統や思想へと進化を遂げた。

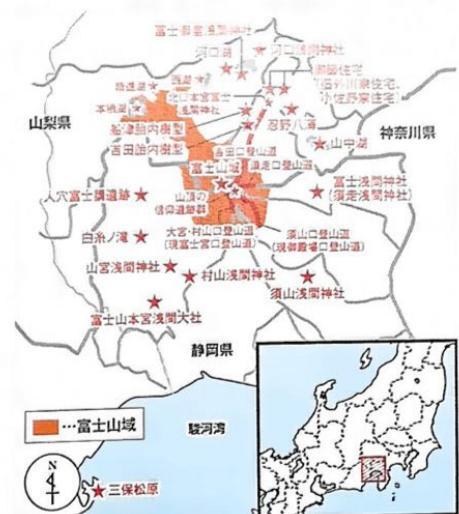
四季折々に変わる富士山の景観は、多くの文学者や芸術家の創作活動においても重要なモチーフとされてきた。19世紀の葛飾北斎や歌川広重などによる浮世絵は、海外にも大きな影響を及ぼした。こうした近代以前の信仰活動や山岳景観に基づく芸術活動を通じて、富士山は「名山」として世界的な地位を確立している。

### 歴史

歴史的に噴火を繰り返してきた富士山は、古くから恐ろしくも神秘的な山として、「遙拝\*」の対象とされてきた。現存する浅間神社のうちのいくつかの社は、8世紀以前に遙拝の場所に建立されたと伝えられている。

富士山の火山活動が活発化した8世紀末、繰り返す噴火を鎮めるため、富士山の火口に鎮座する神を「**浅間大神**」としてまつり、富士山そのものを神聖視するという独自の信仰が生まれた。806年に天皇の命で富士山本宮浅間大社の前身とされる神社が南麓に建立され、865年には、現在の河口浅間神社の前身と考えられる神社が北麓にも建立された。

火山活動が休止期に入った11世紀後半、富士山周辺では日本の山岳信



遙拝：ご神体から離れた場所からその方角に向かい参拝する参拝方法で、富士山の場合は、山麓から山頂を仰ぎ見て参拝する。

仰と、中国から伝来した密教や道教が融合して誕生した修験道の修行が盛んに行われるようになり、各地に修行者の拠点が築かれた。この頃にはご神体である富士山に登りながら祈りをささげる「**登拝**」も行われるようになり、富士山山域には多くの修行者や巡礼者が訪れるようになった。登拝の起点となる登山口には、新たに須山浅間神社や富士浅間神社へと発展を遂げた。長谷川角行は、富士山山麓の穴穴に籠もり、さまざまな苦行や富士五湖や白糸ノ滝での「水垢離」などの修行を行った。こうした激しい修行を通じて宗教的覚醒を得たとされる角行は、不老長寿や無病息災を求める人々の思いに応え、のちに「**富士講**」と呼ばれる富士山信仰の基盤となる組織を創始した。18世紀後半以降になると富士講は一般の人々の間でも流行し、本道とされた吉田口登山道の起点には、登拝前の参詣の場である北口本宮富士浅間神社の境内が整備された。また登山口では「御師」と呼ばれる人々が富士講信者の宿泊や食事の手配、巡礼路案内などを行うようになり、宿泊所などとしても使用された御師住宅が立ち並ぶ集落も形成された。



### 保存上の課題など

2013年の世界遺産委員会では、「文化的景観の手法を反映した全体構想(ヴィジョン)」「來訪者に対する対策」「登山道の保全計画」「情報提供戦略」「危機管理戦略」などの作成が求められ、2012年に策定された「富士山包括的保存管理計画」を2016年と2020年に改定した。

#### TOPICS

#### 構成資産の概要

#### ひとあな ふ じこう ▶人穴富士講遺跡

長谷川角行が苦行を行い、入滅したとされる風穴「人穴」を中心とする遺跡群。周辺には富士講信者が造立した約230基の碑塔群が残る。13世紀にはすでに「浅間大神の御在所」とされており、『吾妻鏡』には鎌倉幕府2代將軍源頼家の命で洞内を探検した武士の靈的体験に関する記述もある。



### ▶富士山本宮浅間大社

806年に富士山の噴火を鎮めるよう平城天皇が坂上田村麻呂に命じ、浅間大神(木花之佐久夜毘賣命)を祀る神社として創建。國內各地に存在する浅間神社の総本宮で、現在も東日本を中心に広く信仰されている。社伝では806年に、富士山により近い遙拝所の山宮浅間神社から分祀したとされ、古くから富士山南麓における中心的な神社であった。富士山山頂は、徳川幕府に認められ奥宮として飛び地の境内地になっている。二重の楼閣構造の本殿は、浅間造と呼ばれる。

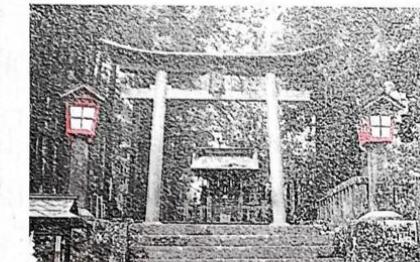


### ▶山宮浅間神社

富士山本宮浅間大社の前身とされる神社。境内には本殿がなく、富士山を仰ぎ見る方向に軸を合わせた位置に祭壇や石列の区画からなる遙拝所がある。独特の境内の地割は、富士山に対する「遙拝」を主軸としていた、古来の祭祀の形式を示している。

### ▶北口本宮富士浅間神社

富士山の遙拝所に祀られていた浅間大神を起源とし、1480年に「富士山」の鳥居が建立され、16世紀中頃に社殿が整えられた。一間社入母屋造りで檜皮葺の本殿に唐破風向拝をつけた形式。社殿の背後に登山門があり、この神社を起点として富士山頂まで吉田口登山道が続いている。江戸時代まで、吉田の御師が宮司や齋宣を務めていた。



### ▶吉田口登山道

北麓の北口本宮富士浅間神社から富士山頂の東部にいたる登山道。二合目は、12世紀後半の紀年銘をもつ神像が奉納されていた場所とされ、遅くとも13世紀から14世紀には修験道の拠点が形成されていた。18世紀以降は「富士講」における登山本道とされた。

### ▶御師住宅

巡礼者の宿泊や食事の手配、巡礼路の案内を行った御師の住宅。北口本宮富士浅間神社の門前にこうした御師住宅が立ち並ぶ集落が形成された。小佐野家住宅と旧外川家住宅の2つの御師住宅が登録された。



日本有数の豪雪地帯である白川郷

岐阜県・富山県



文化遺産

## 白川郷・五箇山の合掌造り集落

Historic Villages of Shirakawa-go and Gokayama

登録年

1995年

登録基準 (iv)(v)



### 登録基準の具体的な内容

#### ●登録基準(iv)：

合掌造り家屋は、雪の重みと風の強さに耐えるために釘などの金属物は一切使用しないなど、環境や風土に合わせて生み出されたもの。日本の農村に見られる民家のなかでも、独特の特徴を持つ重要な様式の建築物群として高い価値がある。

#### ●登録基準(v)：

合掌造り集落は、山間部で暮らす人々の文化を代表する伝統的集落であり、この地域の生産体制、**大家族制度**といった特性や、伝統に見合った土地利用の顕著な見本である。また、大集落(白川郷)、中集落(相倉)、小集落(菅沼)といった、タイプの異なる集落形態は、それぞれの共通性と独自性を示している。

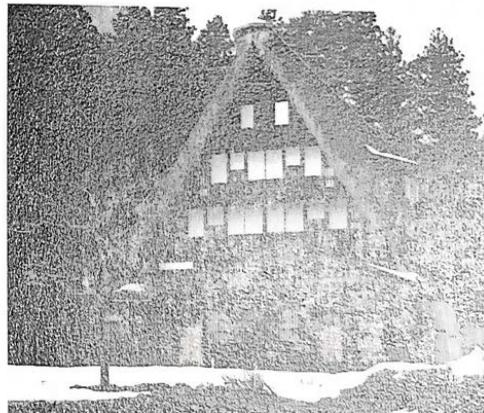
### 遺産の概要

岐阜県と富山県に点在する3つの集落。白川郷(岐阜県白川村の荻町)と五箇山(富山県南砺市の相倉と菅沼)は、約20km離れているが、南北に走る庄川と呼ばれる

川によって結ばれ、1つの文化圏を形成していた。これら3集落には、合掌造りと呼ばれるこの地域独自の家屋が残されており、そのうち白川郷の荻町の60棟\*、五箇山の相倉の20棟、同じく五箇山の菅沼の9棟が登録エリアに含まれる。

この地域は、標高2,702mの白山を中心とした山岳地帯にあたり、冬は一面が雪に閉ざされる日本でも有数の豪雪地帯としても知られ、3つの集落では、1950年代まで他の地域との交流が大幅に制限されていた。また、庄川流域の狭い段丘面に築かれた集落であるため、稲作に適した平坦な土地が少なく、農業はわずかな畑作などに限られていた。それに代わる産業として盛んに行われていたのが、養蚕や和紙漉き、火薬の原料となる塩硝などの生産である。いくつかの集落では耕地の分散を避けるため、かつては10~30人の一族が同じ家屋に暮らす大家族制度が守られており、その労働力を活かせる家内制手工業は主要な財源となっていた。こうした隔絶された環境と地域特有の社会環境や経済事情が、合掌造りというほかの地方では見られない建築様式をはじめ、独自の生活文化を生み出す土壤になった。

1933年から36年まで日本に滞在し、日本の建築についての多くの著作を著しているドイツの建築家ブルーノ・タウトは、合掌造り家屋に関して、「これらの家屋は、その構造が合理的であり、論理的であるという点においては、日本全国でまったく独特の存在である」と語っている。



五箇山の合掌造り家屋

### 歴史

石川県と岐阜県にまたがる白山は、8世紀頃から「白山信仰」と呼ばれる山岳信仰の靈峰とされていた。その白山を中心とする山岳地帯に位置する白川郷と五箇山は、同じく8世紀頃から修験道の修行場として開拓され、その後も長く天台宗の影響下に置かれていた。現在の集落の多くは、12世紀半ばから17世紀前後にかけて、次第に形成されたものと考えられている。

13世紀半ばには、白川郷を中心に浄土真宗が広まり、集落ごとにその寺院や布教のための道場が設けられていった。浄土真宗の思想はその後も長く浸透し、隔絶された環境に暮らす隣人同士の強い結束を育むと共に、相互扶助の伝統的慣習「結」な

ど、この地域独自の社会制度を生み出す土壤となった。江戸時代になると白川郷は高山藩に組み入れられたが、17世紀末に江戸幕府の直轄領となり、そのまま明治維新を迎えた。一方、五箇山は、江戸時代を通じて加賀藩の所領となっていた。

合掌造り家屋が築かれるようになった正確な時期については、現存する家屋がない上、それぞれの建築年代を記した文献などの資料もほとんど発見されていないため不明である。しかし、地域の伝承や最も古い家屋に見られる建築様式などから、17世紀後半にその原型が完成し、養蚕が盛んに行われるようになった18～19世紀に、現在のような大規模家屋に発展したと考えられている。

#### TOPICS

#### 構成資産の概要

##### ▶ 萩町集落(白川郷)

庄川の東側右岸に広がる南北長さ約1,500m、東西最大幅約350mの三日月形をした河岸段丘にある。平入り\*の家屋が多く、土間部には床が張られている。また周囲に塀や生け垣を設けることもなく開放的である。

##### ▶ 相倉集落(五箇山)

3集落のうち、最も北寄りに位置する。地区に残る20棟の合掌造り家屋のほとんどは江戸時代から明治時代にかけて建造されたものだが、少數ながら昭和初期に建造されたものも含まれる。平地が少ない河岸段丘に位置するため、石垣によって敷地を平坦に造成するなどの工夫が見られる。

##### ▶ 菅沼集落(五箇山)

富山県と岐阜県の県境に位置する集落で、平面は四間取りを基本としているが六間や三間取りもある。また妻側に半間ほどの下屋をつくりその中央に妻入り\*の出入口を設けている。

#### 合掌造りの特徴

##### ①屋根

合掌造り家屋の特徴である45～60度の急傾斜の屋根は、豪雪地帯であると共に、月の平均雨量が180mmに達するこの地域の気候条件に合わせて生み出されたもので、雪降ろしの負担軽減や水はけを良くする効果をもつ。各家屋の屋根の傾斜に

平入り：屋根がある側に入口をもつ家屋。  
妻入り：三角形の切妻側に入口を置き、そこに庇をつけて母屋風の外観をもつ家屋。

は建築年代の古いものほど緩く、新しいものほど急になる傾向が見られる。また、秋から冬にかけて、平均風速20mの風が吹く荻町では、家屋の妻側を南北に向けて、風を受け流すよう工夫されている。

##### ②広い床面積

一般家屋に比べ、床面積が広い。塩硝は、床下の穴に雑草と蚕糞、土を混ぜあわせたものを入れ、3～4年間、土壌分解させてつくっていたため、広い床面積が不可欠であった。また、伝統的に大家族制が守られていたため、広い居住スペースを必要としていた。

##### ③ウスバリ構造

小屋組\*と、軸組\*を分離する、合掌造り家屋の構造的な特徴。ウスバリとは、小屋組の底辺(床)を構成する部分で、これにより小屋組と軸組は構造的、空間的に分離されていた。さらに、おもに養蚕などに使用された小屋組部分は、下部の「アマ」と上部の「ソラアマ」に分けられる。



床面積の広い構造

#### 村による共通点と相違点

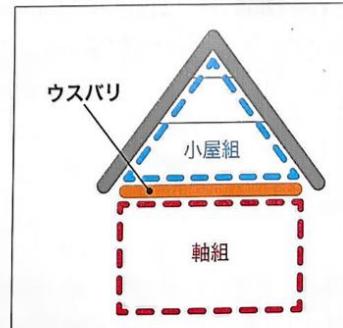
##### ●共通点

結：白川郷と五箇山では、浄土真宗への信仰心を基に隣人同士の結束力が強く、また厳しい自然環境の下では家族だけでの生活は成り立ちにくいため、相互扶助組織である「結」による協力体制が発展した。

##### ●相違点

煙抜き：五箇山の屋根には煙抜きがあるが、白川郷の屋根には煙抜きがない。煙抜きがないと一年中囲炉裏の火を絶やさない室内には煙が充満してしまうが、煙で燻されて部材が腐りにくくなるため、屋根が長持ちするという利点がある。

入口：白川郷では平入りが一般的だが、五箇山(特に菅沼)では妻入りが多い。



□ ウスバリ構造

小屋組：屋根を支える骨格構造で、勾配のある屋根を形成する三角形の部分。  
軸組：屋根や2階部分の重みを支える基礎部分。



京都府・滋賀県



## 古都京都の文化財

Historic Monuments of Ancient Kyoto (Kyoto, Uji and Otsu Cities)

文化遺産

登録年 1994年 登録基準 (ii)(iv)



### 登録基準の具体的な内容

#### ●登録基準(ii) :

8世紀末から19世紀中期まで日本の首都が置かれた京都は、政治、経済の中心地であると共に、各時代の文化を牽引してきた。12世紀までの神社や寺院に多く見られる「和様」や、16世紀末から17世紀初頭に用いられた装飾の多い「桃山様式」などの日本を代表する建築様式の多くは、京都で洗練され日本各地に伝えられた。「浄土庭園」や「枯山水」などの庭園様式も同様である。16世紀以降、京都の都市構造は日本各地の都市建設におけるモデルとされ、「小京都」と呼ばれる都市が多く築かれた。日本の建築や造園、都市計画などの発展に大きな影響を与えていた。

#### ●登録基準(iv) :

登録された17の構成資産は、日本における各時代の建築様式や庭園様式の代表例であり、その発展の歴史を伝える重要な史料である。それぞれの建築や庭園、周囲の自然環境が融合した景観は、日本独自の精神性や文化を示している。

### 遺産価値総論

京都は平安京として築かれて以来、1,000年以上にわたり日本の都として栄えた。東、北、西を豊かな緑の山で囲まれた盆地にあり、都市の中心部は内乱や火災などでたびたび焼失したが、周囲の山には各時代の資産が残されてきた。また、16世紀末以降の資産は中心部においても残されており、長い歴史の中で焼失や再建が繰り返されながらも、創建当初に近い姿で保存

されている点も評価された。17件の構成資産には、多くの国宝や重要文化財、特別名勝・史跡が含まれ、日本の木造建築、宗教建築、日本庭園の歴史と発展過程、日本の伝統美を示している。

### 歴史

古代中国の唐の都城を規範に、桓武天皇が平安京を794年に築いて以降、約400年にわたり貴族文化の中心地として國風文化が花開いた。平安京造営当初を伝える資産としては、国家鎮護の宗教施設である「賀茂別雷神社」や「賀茂御祖神社」、平安京の鬼門に位置し後に国家鎮護の道場として繁栄した「延暦寺」などがある。平安時代前期から後期にかけては、東西の2つの官寺以外は平安京内の寺院建立が禁じられたため、市中が都市的な機能の場となった一方、周囲の山中に寺院が築かれた他、貴族の別荘なども建てられた。平安時代末期になると、貴族政治が衰退し武士が台頭したことなどにより社会が混乱した上に末法思想なども重なって、阿弥陀仏の



#### □古都京都の文化財



救いによって極楽淨土への導きを願うようになった。その時代を伝えるのが、淨土思想が文化的に完成した「平等院」や、その鎮守社の「宇治上神社」である。

1185年の内乱を経て、鎌倉に政権が誕生した後も、京都には朝廷貴族の権威が維持されており、公家文化や武家文化、仏教文化が影響し合っていた。その時代を代表するのが、鎌倉時代の住宅的な建築様式を伝える「高山寺」である。1338年に室町幕府が成立し京都に政権の中心が戻ると、足利義満の山荘（後の「鹿苑寺」）に象徴される、武家の権威を示しつつ憧れの公家文化を取り入れ、そこに禅宗を通じて中国文化を融合させた北山文化が栄えた。15世紀中頃には、その融合をさらに深化・洗練させた足利義政の山荘（後の「慈照寺」）に象徴される東山文化が栄えた。

1467年から10年にわたる応仁の乱によって、京都は都市としての形を失うほど被害を受け古代からの多くの資産が焼失したが、時の権力者や、経済力を高めていた町衆と呼ばれる有力市民らの手で再建・保護されてきた。応仁の乱以降続いた戦乱の世を経て、織田信長に続く豊臣秀吉の天下統一、徳川家康による江戸幕府の誕生により政治が安定し、都市では商工業が栄えて武将や豪商を中心とする桃山文化と呼ばれる豪華華麗な文化が花開いた。この時代を象徴するのが、秀吉自ら設計を行った「醍醐寺」の三宝院の殿堂や庭園、豪華な書院建築の「本願寺」、二の丸御殿の残る「二条城」である。江戸時代には「清水寺」や「仁和寺」などが伝統的な建築様式を用いて再建された。明治維新以降は、1897年の古社寺保存法や、1929年の国宝保存法などで保護され、1950年以降は文化財保護法で保護されている。



清水寺

二条城：二条城と本願寺は、桃山時代終了直後に再建されているが、桃山様式をよく伝えている。

## TOPICS 構成資産の概要

### 遺産名

### 概要

資産から見られる時代

|                       |  |           |
|-----------------------|--|-----------|
| 賀茂別雷神社<br>(通称: 上賀茂神社) | 7世紀末創建。賀茂別雷命*を祭神とする。本殿と権殿*は国宝。背後の神山も含む。                  | 平安時代      |
| 賀茂御祖神社<br>(通称: 下鴨神社)  | 8世紀中ごろ賀茂別雷神社から分立。流造本殿の代表例。糺の森も含む。                        | 平安時代      |
| 教王護国寺<br>(通称: 東寺)     | 796年造営の羅城門の東西に建立された官寺の1つ。五重塔は創建当時の形式を受け継ぐ。               | 平安時代      |
| 清水寺                   | 780年に私寺として建立され、805年に桓武天皇の勅願寺となり寺地が認められた。懸造の本堂は坂上田村麻呂が建立。 | 平安時代、江戸時代 |
| 延暦寺                   | 天台宗を開いた最澄が788年に建立。日本の仏教各派を開いた多くの高僧が学んだ。                  | 平安時代      |
| 醍醐寺                   | 874年から山上伽藍が、904年から平地伽藍が整備。15世紀の戦乱で焼失したが再建された。            | 平安時代、桃山時代 |
| 仁和寺                   | 888年に宇多天皇が建立した勅願寺。明治維新まで皇子、皇孫が門跡を務めたため、御室御所と称された。        | 平安時代、江戸時代 |
| 平等院                   | 貴族の別荘を、1052年に藤原頼通が寺院へと改修。1053年に阿弥陀堂（鳳凰堂）が建立された。          | 平安時代      |
| 宇治上神社                 | 平等院鳳凰堂完成後に、鎮守社として整備された。現存する最古の神社本殿建築とされる。                | 平安時代      |
| 高山寺                   | 774年に創建された寺院が1206年に明惠上人によつて整備され、高山寺と改称。石水院のみが現存。         | 鎌倉時代      |
| 西芳寺                   | 731年創建の寺を、1339年に夢窓疎石が禪宗寺院として復興。庭園は日本庭園史上重要な位置を占める。       | 室町時代      |
| 天龍寺                   | 嵐山を背景として1255年に造営された離宮を1339年に禅寺に改築。三門、仏殿、法堂、方丈が一直線上に並ぶ。   | 室町時代      |
| 鹿苑寺（通称: 金閣寺）          | 足利義満の死後、夢窓疎石が禅寺として開山。鹿苑寺庭園の舍利殿（金閣）は1955年に再建された。          | 室町時代      |
| 慈照寺（通称: 銀閣寺）          | 足利義政の死後、禅寺となった。慈照寺庭園は1615年の改築後、盛り砂の銀沙灘と向月台が加えられた。        | 室町時代      |
| 龍安寺                   | 貴族の別荘の地を禅寺に整備したもの。1488年に方丈が再興された。枯山水の方丈庭園は世界的に有名。        | 室町時代      |
| 本願寺                   | 大坂*にあった浄土真宗本願寺派の本山が、1591年に京都に移された。唐門や飛雲閣などが残る。           | 桃山時代      |
| 二条城                   | 1603年に徳川幕府が京都御所の守護と將軍上洛時の宿泊所として造営。二の丸庭園は池泉回遊式。           | 桃山時代      |

賀茂別雷命：玉依比売の子で、京都全域の守り神。 権殿：本殿の造営や修復の際などに、ご神体を遷す御殿。 大坂：大阪の当時の表記。



**奈良県**

## 古都奈良の文化財

Historic Monuments of Ancient Nara

文化遺産  
登録年 1998年 登録基準 (ii)(iii)(iv)(vi)

### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(ii) :

8世紀に中国大陆や朝鮮半島から伝えられ、日本で独自に発展した仏教建造物群は、当時の日本の木造建築技術が高度な文化的、芸術的水準を有していたことを物語ると共に、日本と中国、朝鮮との間における密接な文化的交流の歴史を示している。中国や韓国では、同年代の木造建築の大部分が失われていることからも、これら建造物群の世界史的な価値は極めて高い。

#### ●登録基準(iii) :

日本における代表的な古代都城を構成する資産群である。710年から784年までの約74年間という限られた期間の都であった「平城宮跡<sup>へいじょうきゅうせき</sup>」は、失われた考古学的遺跡としての価値も高い。中世以降、平城京の中心から離れた場所で新たな街(現在の奈良市)が発展したため、平城宮跡では廃都された当時のままの地下遺構が良好な状態で残されている。遺構と、地中から発掘された木簡などの遺物は、当時の文化や慣習を伝える貴重な史料である。

平城宮跡：平城京の中央北端に位置していた宮城跡。北端の平城宮を中心として右京と左京に分かれており、他の都城としては例がない外京を、左京の東側に張り出す形でもっていた。p.69 地図参照。

#### ●登録基準(iv) :

各寺院、神社からは、宗教の影響力の下で律令制が日本全国に定着していき、寺院や神社の力が社会的、政治的に大きくなつていった様子が伝わる。これらの建造物群は、奈良時代の日本の寺院建築様式をよく留めており貴重である。

#### ●登録基準(vi) :

世界遺産に登録された建造物群は、神道や仏教などの日本の宗教的空間の顕著な特徴を示している。構成資産の1つである「春日大社」の背後に広がる「春日山原始林」は、自然の山や森を神格化しようとした日本独特の神道思想を示すものである。この地域では、現在も神道や仏教をはじめとする宗教儀式や行事が盛んに行われており、宗教文化を継承している点でも重要である。

### 遺産の概要

この地に日本の首都「平城京」が置かれていた時代の面影を今に伝える。世界遺産には、中国の唐の首都であった長安などをモデルに造営された都にあった

寺院などの他、春日山原始林を含む計8件が登録されている。

奈良時代は、唐から学んだ律令制の下、日本の国家としての仕組みが形成された時代であった。その中心地となった平城京では、一貫した佛教興隆政策の下で、数多くの寺院が建造・移築された。こうした寺院や平城宮跡などの歴史的建造物や遺構は、中央集権が確立された時代の政治状況や、およそ10万人が暮らしていたとされる当時の街並の様子を今に伝えており、この時代に日本が文化的、芸術的に高い水準に達していたことがわかる。

### 歴史

708年、元明天皇は新たな日本にふさわしい首都を築くべく、東、北、西の三方を



#### □ 現在の奈良と平城京の範囲

山々に囲まれた盆地に平城京を造営した。都の北中央に政治や儀式などを執り行う「平城宮」が建造され、遷都が行われた710年以降、74年間にわたり文字通り日本の政治、経済、そして文化の中心地としての役割を果たした。

平城京への遷都後、まず718年に元興寺と薬師寺が、旧都である飛鳥藤原地方から移築され、720年頃に

は興福寺の造営工事も始まった。745年には、国家鎮護のため東大寺の建造が発願された。その造営は、当時の国力を総動員する大事業として行われ、751年には金堂(大仏殿)が完成し、さらにその翌年には大規模な「大仏開眼法要」が盛大に執り行われた。伽藍全体の建造は奈良時代末まで続き、巨大な建造物群が完成した。745年には唐から鑑真が来日し、759年には唐招提寺の建立が始まった。春日大社の創建は768年とされるが、756年の『東大寺山廻四至図<sup>\*</sup>』では、春日山西麓の場所が「神地」とされていることから、それ以前に神社が完成していた可能性も指摘されている。

平安京に都が移った後も、平城京の寺院の一部は朝廷の保護下に置かれ、唐招提寺の五重塔の建造や新たな造営工事が継続して行われた。しかし、平安時代末の1180年、奈良は内乱に巻き込まれ、東大寺と興福寺では、伽藍の大部分が焼失するなど、壊滅的な被害を受けた。室町時代に入ると奈良の寺社の多くは衰退した。

明治維新後の近代化の中で生じた、国内の文化財を軽視する風潮は、奈良の寺院群にも及んだが、その後、「古社寺保存法」や「国宝保存法」、「史跡名勝天然記念物保存法」などが制定され保護されるようになった。

### 保存上の課題など

2011年の世界遺産委員会において、「平城京遷都1300年祭」に関連して再建された仮設物の撤去や、大和北道路の建設による平城宮跡への影響、平城宮跡に復元を予定している建造物の真正性の問題などが指摘され、2015年1月までに包括的保全計画書が提出された。また、景観と遺跡保護のため平城宮跡を横切る鉄道線の移設が計画されたが、現在は計画の予算執行が停止されている。

東大寺山廻四至図：正倉院に保管されていた、東大寺の寺域を示した絵図。



東大寺の金堂(大仏殿)

### ▶ 元興寺

6世紀に蘇我馬子が建立した「飛鳥寺」が起源。8世紀に平城京に移築された。奈良時代後期には「南都(平城京)七大寺」の一つとして繁栄。元興寺極楽坊の本堂の瓦には、飛鳥時代の瓦も残る。

### ▶ 興福寺

平城京への遷都にともない、山階(現・京都市山科区)から飛鳥を経て移築された669年創建の寺院を起源とする。藤原不比等によって移築された後は、藤原氏の氏寺とされ、その権勢のもとで大いに繁栄した。

### ▶ 薬師寺

680年に天武天皇の発願によって建立された寺院。718年、藤原京から平城京に移築された。金堂前面の東西に白鳳文化の代表例とされる三重塔が立つ「薬師寺伽藍配置」で知られるが、度重なる火災や台風の被害により、現存する創建時の建物は東塔のみである。

### ▶ 春日大社

藤原氏の氏神をまつる神社で、藤原氏や朝廷の崇敬を受けて繁栄した。平安時代後期には興福寺と一体化されたが、明治の「神仏分離令」によって再び分けられた。本殿は春日造で、春日神<sup>\*</sup>と称される四柱が4棟に分かれて祀られている。

### ▶ 春日山原始林

春日大社の社殿周辺から御蓋山(三笠山)、春日山にかけては聖域とされ、841年に狩猟と伐採が禁止されて以降、神山として守られてきた。山中の水源には、枯渇しないように水神、雷神がまつられ、都の守護神とされていた。

### ▶ 平城宮跡

1955年から発掘調査が始まり、建物の配置や変遷、役所名などの律令組織、行政や生活の実態などが明らかになっている。

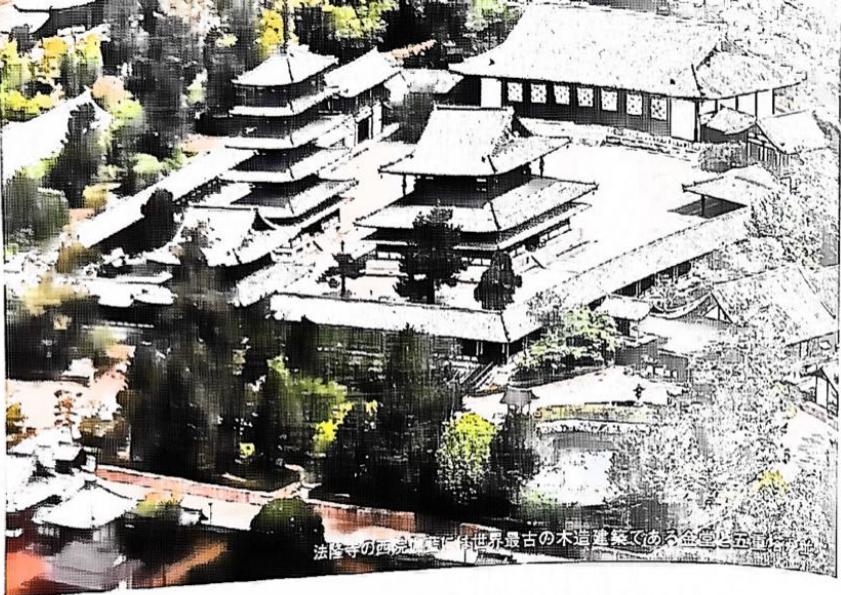
### ▶ 唐招提寺

戒律を学ぶ寺として鑑真が創建。金堂は、奈良時代の金堂建築として唯一残るもの。

### ▶ 東大寺

奈良時代末に伽藍全体がほぼ完成。南大門、法華堂、鐘楼、金堂(大仏殿)、銅造盧舎那佛坐像(大仏)、開山堂、転害門、本坊經庫、正倉院正倉が国宝。

春日神：藤原氏の氏神で、武甕槌命、経津主命、天児屋根命、比売神の四柱の総称。



法隆寺の西院、百物語世界最古の木造建築である金堂と五重塔

**奈良県**

## 法隆寺地域の佛教建造物群

Buddhist Monuments in the Horyu-ji Area

文化遺産

登録年 1993年 登録基準 (i)(ii)(iv)(vi)

### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(i)：

法隆寺と法起寺に残る木造建築物群は、全体の設計やデザイン性の高さに加え、エンタシスをもつ太い柱や、雲形の肘木や斗などの細部の装飾も優れており芸術的価値を有している。

#### ●登録基準(ii)：

法隆寺地域の佛教建造物は、日本における佛教建造物の最古の例として1,300年間の伝統の中で、それぞれの時代の寺院の発展に影響を及ぼしてきた。日本文化を理解する上でも重要な遺産である。

#### ●登録基準(iv)：

7世紀から8世紀初頭にかけて築かれた建造物には、石窟寺院や絵画的資料からうかがえる6世紀以前の中国建築と共通する様式上の特色が見られる。また、8世紀に築かれた建造物は、唐の様式の影響がうかがえる。これらは当時の中国と日本、東アジアにおける密接な建築上の文化交流を伝える。1つの地域に集中して7世紀

から19世紀までの各時代における優れた木造建造物が保存されている例は他に類がない。

#### ●登録基準(vi)：

佛教がインドから中国朝鮮を経由して日本に伝來したのは6世紀半ば。聖徳太子は当時佛教の普及にきわめて熱心であり、太子ゆかりの法隆寺は日本の佛教の最も古い時代の建造物を多数保存しており、宗教史の観点からも高い価値がある。

### 遺産価値総論

法隆寺に属する47棟と法起寺の三重塔1棟の計48棟で構成されている。法隆寺西院の金堂、五重塔、中門、回廊、法起寺三重塔など、8世紀以前に建造された11棟の建物は、現存する世界最古の木造建造物である。

6世紀半ばの欽明天皇の時代に佛教が日本に伝来すると、続く7世紀、推古天皇の摂政であった聖徳太子は、自らも仏典を著すなど、日本における佛教の普及に熱心に取り組んだ。聖徳太子ゆかりの寺院を含むこの地域の建造物は、日本における最初の佛教寺院群であるとともに、その後1,300年間にわたる日本の佛教建築の発展に多大な影響を及ぼし続けてきた。

7世紀から8世紀にかけて建造されたものには、北魏や唐といった各時代の中国で発展した建築様式が見られ、当時の中国大陸と日本の間で行われた技術や文化交流の様子を物語る。さらに西院や五重塔などの一部の建物の柱には、「エンタシス\*」の技法が取り入れられている。

### 歴史

法隆寺地域における最初の佛教寺院は、607年に推古天皇とその摂政を務めた聖徳太子によって築かれた若草伽藍(斑鳩寺)である。670年に焼失したが、その遺構は現在も法隆寺境内の地下部分に残る。現在の法隆寺西院の直接の起源となったのは、7世紀後半から8世紀初頭に若草伽藍から場所を移して再建された寺院と考えられる。

\*エンタシス：柱の中央部分を膨らませた形状。ギリシャのパルテノン神殿などで用いられている。



中央が膨らんだエンタシスの柱

えられている。この西院とともに、現在の法隆寺の中核部を構成している法隆寺東院が築かれたのは8世紀前半。聖徳太子没後の739年に、その住居だった斑鳩宮跡院が起きたために建設された伽藍(上宮院)が起源とされる。当初、に聖徳太子の靈をまつるために建設された伽藍(上宮院)が起源とされる。当初、法隆寺の僧侶たちは、講堂の周辺に設けた僧坊などで共同生活をしていたが、11世紀頃になると高僧を中心とした小集団が独自に宗教活動を行うようになり、一帯にはそれぞれの拠点となる小寺院(子院)が建設された。

法起寺は、聖徳太子死後の7世紀に、その子息である山背大兄王が、聖徳太子の宮であった岡本宮跡に建立した寺を起源とする。16世紀末の戦乱でほぼ焼失したため、往時の姿を残すのは高さ24mの三重塔のみ。

法隆寺をはじめとするこの地域の寺院は、古くは「鎮護国家の寺」として、天皇家によって手厚く保護された。12世紀頃になると、一般の人々の間でも「聖徳太子信仰」が広まったことで、法隆寺を多くの信者が訪れた。法隆寺地域の寺院は常に各時代の権力者のもとで保護されてきたが、明治維新を迎えると神道を重んじ仏教を排斥する思想のもとで次第に荒廃した。しかし文化財保護の重要性から、明治政府によって1897年に「古社寺保存法」が制定されると、再び国家の保護下に置かれ、保存の道が開かれた。

### 保存上の課題など

世界遺産登録における真正性では当初、石の文化のように建造当時のものがそのまま残っていることが重視されており、木や土の文化においてはその建造物の真正性が認められにくかった。日本政府は法隆寺関連の木造建造物群を世界遺産登録するにあたって、木の文化における保存・修復の歴史を説明し、それが「真正性における奈良會議」の開催につながった。「奈良文書」の採択には、「法隆寺地域の仏教建造物群」で行われてきた木造文化財の修復の歴史が大きく影響を与えていた。



法隆寺中門金剛力士(吽形)

## TOPICS 構成資産の概要

### ▶ 法隆寺西院伽藍

東に金堂、西に五重塔が並ぶ西院伽藍の配置は「法隆寺式伽藍配置」と呼ばれる。711年頃に西院伽藍の金堂が再建され、その後伽藍全体が再建された。西院の構造や意匠、金堂内部の釈迦三尊像のアルカイク・スマイル(古式の微笑み)などに、北魏時代(6世紀)の中国文化の影響が伺える。

金堂や五重塔には、「雲形組物\*」が用いられて

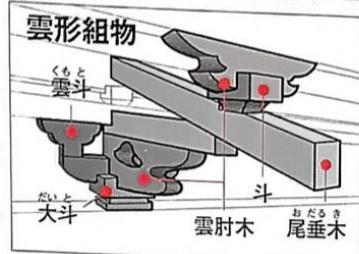
いる。こうした装飾性は、古代中国の建築とも共通する。また、法隆寺中門は、通路となる門の中央部に柱を置く「四間門」である。中門の左右には阿形と吽形の2体の金剛力士像が置かれている。元は共に塑像であったが、吽形の像は後に頭部と右腕を除き木像に補修された。五重塔は上にいくほど屋根が小さく塔身も細くなってしまっており、デザインに対する評価も高い。

### ▶ 法隆寺東院伽藍

8世紀前半に建設した伽藍。周囲に回廊がめぐる「夢殿」を本堂とする。これは現存する最古の八角円堂で、屋根には「八注造」と呼ばれる宝形造の変化形である様式が用いられている。その緩やかな勾配は、天平時代の建築様式の特徴を今に伝えている。夢殿の本尊は救世観音菩薩立像で、聖徳太子と等身と伝えられる。救世観音立像は明治時代まで白い布に覆われた秘仏であったが、明治政府の命を受けたアメリカの東洋美術史家アーネスト・フェノロサと美学研究家の岡倉天心が開示を要求し、姿が明らかになった。

### ▶ 法起寺

法隆寺の北東約1.5kmに位置し、現在は法隆寺を総本山とする聖徳宗の寺院となっている。境内に唯一現存する創建当時の建造物である三重塔は高さ約24m。三重塔としては日本最古かつ最大規模のものとして知られる。法隆寺の五重塔と比べ、法起寺の三重塔の方が完成は早いが、着工年は法隆寺の五重塔の方が古く、世界最古の木造の塔は法隆寺の五重塔とされている。



雲形組物：曲線を描く雲型の肘木や斗などの部材を組み合わせて、屋根の軒を支える構造。



和歌山県・奈良県・三重県



## 紀伊山地の霊場と参詣道

Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range

文化遺産

登録年 2004年/2016年範囲拡大 登録基準 (ii)(iii)(iv)(vi)

文化的景観



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(ii) :

空海によって創建された「高野山」には、多くの仏教建築が残されているほか、「吉野・大峯」と「熊野三山」には、日本古来の自然崇拜と仏教が融合して形成された「神仏習合」の宗教觀に基づいて築かれた仏教寺院建築群と独特の様式を持つ神社建築群が残る。これらは周囲の山岳景観と共に、霊場における顕著な文化的景観を形成し、日本各地へと伝えられて、それぞれの地域における霊場形成のモデルとなつた。紀伊山地の景観は、東アジアにおける宗教文化の交流と発展の結果生まれた、他に類を見ない顕著な例である。

#### ●登録基準(iii) :

各寺社の境内や参詣道には、今は失われた木造及び石造の建造物や宗教儀礼に関する豊富な考古学的文化財が残されている。これら多くの遺跡では、今なお参詣者による宗教儀礼が行われているなど、宗教文化の重要な継承の場となっている。

#### ●登録基準(iv) :

紀伊山地に残る多くの仏教建築や「熊野三山」などの神社建築は、木造宗教建築の代表例であり、歴史上、芸術上の建築的価値は極めて高い。また、近世以降、徳川幕府の諸大名によって高野山奥院に築かれた多数の石塔婆は、その規模や様式の多様性の点で重要であると共に、日本独自の石造廟様式の変遷を示す顕著な例である。

#### ●登録基準(vi) :

建造物や遺跡は、神道と仏教、そしてその融合の過程で生み出された「修驗道」など、日本独自の信仰形態の特質を表す顕著な例であり、また、山岳地帯に残る修行場や神聖性の高い自然物は、信仰に関する独自の文化的景観を形成している。



□ 参詣道

### 遺産の概要

紀伊山地に点在する「吉野・大峯」、「熊野三山」、「高野山」の3つの霊場と、それらを結ぶ参詣道によって構成される。標高1,000~2,000m級の山脈が連なる紀伊山地は、年間の降雨量が3,000mmを超える多雨地帯である。豊かな雨が育む緑深い森林景観は、古くから「神の宿る場所」として崇められ、山や森、川、滝などを神格化する日本古来の自然信仰を育む土壤となっていた。

中国大陸から仏教や道教が伝えられると、紀伊山地は「神仏習合」をはじめ、「淨土教」、「修驗道」など、さまざまな信仰における聖地とされた。そのため紀伊山地には、起源も内容も異なる3つの霊場と、そこに至る「参詣道」が整備され、都をはじめ、日本各地から多くの参詣者がこの地を訪れるようになった。

自然環境を中心に数多くの信仰形態が育まれてきたため、日本ではじめて文化的景観が認められた。



那智大佛

## 歴史

7世紀後半、仏教が国家を鎮護する宗教になると、古くから自然信仰の神域とされていた紀伊山地では、山岳修行が盛んに行われるようになった。816年、空海が高野山に「金剛峯寺」を創建し、紀伊山地は真言密教の修行場として定着した。9世紀から10世紀にかけて、「神仏習合」の思想が広まると、紀伊山地はその聖地として中国から伝えられた道教の神仙思想と日本の山岳信仰が融合し、独自の宗教である「修験道」が成立する。吉野・大峯には、厳しい修行によって超自然的な能力を得たいと願う多くの修験者が集まるようになった。

11世紀になると、「浄土教」の流行にともない、紀伊山地には、仏教諸尊の淨土があると考えられるようになり、死後の成仏を願う皇族や貴族、有力武士によって多くの寺社が建立された。こうして紀伊山地には、上皇をはじめとする多くの皇族や有力貴族が参拝に訪れ、次第に各靈場や参詣道が整備されていった。14世紀の南北朝時代には、吉野山に南朝の拠点が置かれたため、北朝から侵攻され多くの社寺が被害を受けた。紀伊山地への信仰は江戸時代を通じて保たれたが、明治維新後の1868年に「神仏分離令」、そして1872年に「修験道廃止令」が制定されると、仏教関連施設は破棄されるか、名称を変更して神社の付属施設にされるなどの厳しい状況に直面した。1897年に「古社寺保存法」が成立し、多くの文化財や宗教文化が守られた。

## 保存上の課題など

台風や大雨などの自然災害のほか、参詣道沿いのバッファー・ゾーンの範囲外に位置する住宅の建て替えや開発による景観の悪化などが指摘されている。また、構成資産に含まれる道は土地所有者と管理者が同じとは限らないだけでなく、道全体が1つの管理者の管理下にあるわけではないため、保存管理が難しいという点も指摘されている。



吉野水分神社

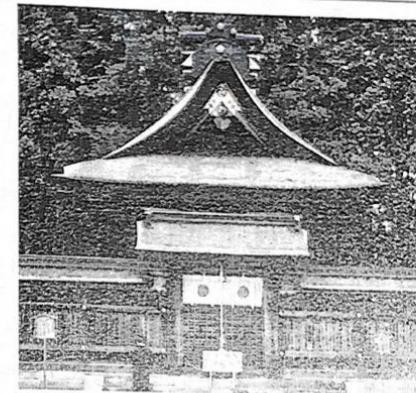
## ▶ 吉野・大峯

水を支配し、金などの鉱物資源を産出する山として崇められた金峯山を中心とする「吉野」と、その南に連なる修験道の修行の場である「大峯<sup>\*</sup>」で構成される紀伊山地最北部の靈場。

吉野山のふもとに立つ金峯山寺、山上ヶ岳の頂上に立つ大峰山寺の起源となる寺院は、役行者によって7世紀に開かれたとされる。役行者が修行中に桜の木に蔵王権現を彫り込んだとされており、吉野山は平安時代中期より桜の名所として知られている。他にも水分嶺信仰の吉野水分神社や、後醍醐天皇の行在所であった吉水神社など。

## ▶ 熊野三山

紀伊山地の南東に、20~40kmを隔てて点在する「熊野本宮大社」、「熊野速玉大社」、「熊野那智大社」の総称。10世紀、神仏習合の広まりと共に、互いの主祭神を合祀し、「熊野三所権現」として信仰を集めた。他にも熊野那智大社と一体となった寺院として信仰された青岸渡寺や、熊野三山の祭神である熊野夫須美大神の本地仏である千手觀音を本尊とする補陀洛山寺、那智大滝、那智原始林など。



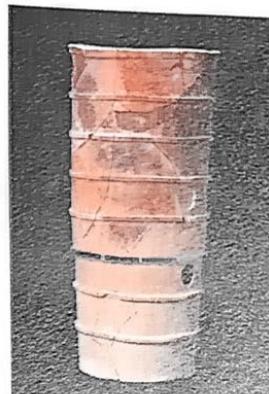
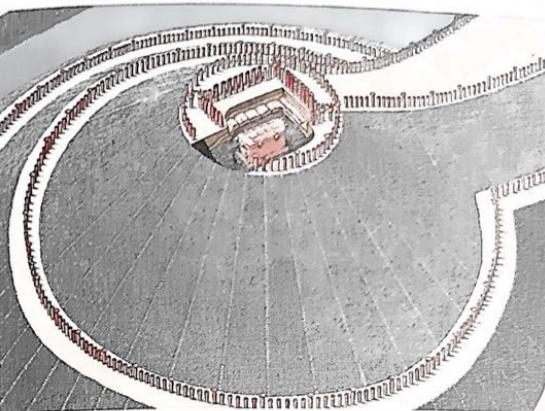
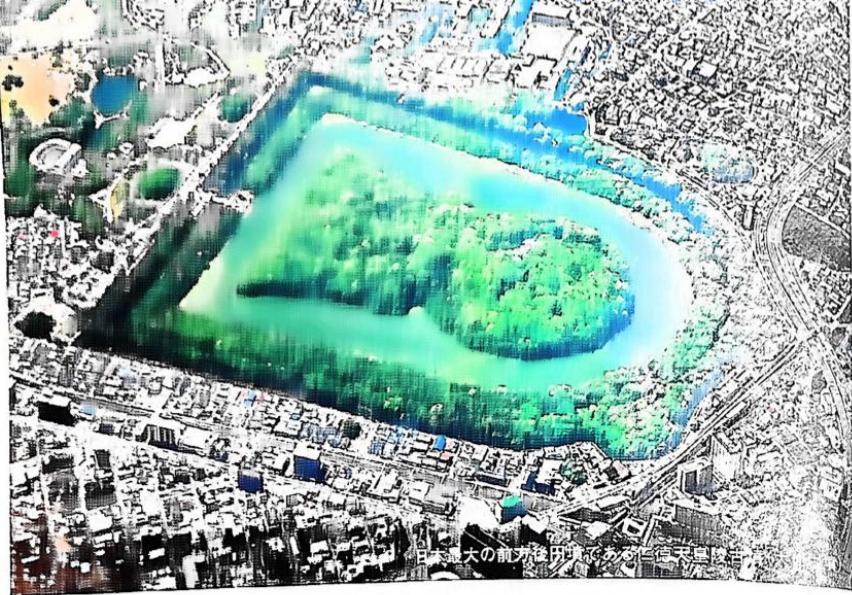
## ▶ 高野山

金剛峯寺を中心とする「真言密教」の靈場。建造物群は、標高800mの山上にある約3haの平地に立っており、「八葉の峰」とも呼ばれる。本堂と多宝塔を組み合わせた金剛峯寺の伽藍配置は、全国の真言宗寺院のモデルとなった。また、高野山はかつて女人禁制であったため、参拝する女性はふもとの慈尊院を詣でた。他にも高野山一帯の地主神を祀る丹生都比売神社など。

## ▶ 参詣道

「大峯奥駈道」、「熊野参詣道」、「高野参詣道」の3つの参詣道。靈場の発展にともない増加した参詣者の入山のために整備された。参詣では、口にするものや行為を制限し、心身を清浄に保つことが求められたため、参詣道は下界から神域へと近づく際の修行の場でもあった。

**大峯:** この一帯は「大台ヶ原・大峯山」として生物圏保存地域に指定されているが、これは修験道が靈場としたために、木々の伐採が禁止され自然林の植生が良好に保存されているため。



前方後円墳の墳丘は図のように埴輪や葺石で装飾された

応神天皇陵古墳から出土した円筒埴輪

大阪府



文化遺産

## 百舌鳥・古市古墳群

Mozu-Furuichi Kofun Group: Mounded Tombs of Ancient Japan

登録年 2019年／2023年範囲変更 登録基準 (iii)(iv)



### 登録基準の具体的な内容

#### ●登録基準(iii)：

『百舌鳥・古市古墳群』は、墳墓の規模と形によって当時の政治・社会構造を表現しており、古墳時代の文化を物語っている。古墳時代においては、社会階層の違いを示す高度に体系化された葬送文化が存在し、古墳の建設が社会秩序を表現していた。この地は日本列島の各地で築かれた古墳群が形成する階層構造の頂点にあり、最も充実した典型的な階層構造は他の古墳群の見本となった。

#### ●登録基準(iv)：

日本列島独自の墳墓形式である古墳の顕著な事例であり、集団や社会の力を誇示するモニュメントとして祖先の墓を築き社会階層を形成した、日本独自の歴史段階を示している。この地に密集して築かれた古墳は、世界各地の墳墓に見られるような埋葬施設の上に盛土や積石をしただけの単純な墳墓ではなく、葬送儀礼の舞台としてデザインされている。埴輪と葺石で装飾され、濠が張り巡らされ、幾何学的な段築をもつなど、他に類例のない独自の建築的到達点である。

### 遺産の説明

『百舌鳥・古市古墳群』は、百舌鳥エリア(大阪府堺市)にある「仁徳天皇陵古墳(大仙古墳)」や、古市エリア(大阪府藤井寺市、羽曳野市)にある「廟山古墳」などの、45件49基の大小様々な古墳で構成されている。仁徳天皇陵古墳のような大きな古墳には、陪冢と呼ばれる小型の古墳が付属していることがあり、構成資産としてはそれらを合わせて1件と数えているため、構成資産数と古墳数が異なる。

関西地方を中心に日本各地に古墳があるが、「百舌鳥古墳群」と「古市古墳群」の2カ所の古墳群は、仁徳天皇陵古墳(大仙古墳)という日本最大の古墳があることに加え、「前方後円墳」「帆立貝形墳」「円墳」「方墳」という日本列島の各地に見られる古墳の標準的な形式4つを含んでいる点が特徴。また大きさは20～500mのものまで存在し、著しい規模の差が見られる。こうした古墳群から、日本の古墳時代の個人の権力の大きさや社会的な権力の構成などを証明できると考えられている。

### 歴史

日本列島では3世紀中頃に最初の前方後円墳が現れ、それ以後、さまざまな形と大きさを持つ古墳が各地に多く築かれた。3世紀中頃から6世紀後半に各地で築かれた古墳は16万基以上にのぼり、東北南部から九州南部にかけて約1,200kmの範囲に広がっている。この時代のことを古墳時代と呼ぶ。

古墳築造の中心となったのが、日本列島の中央に位置する現在の奈良県と大阪府だった。ここに最も巨大で新しい様式を備えた前方後円墳が築かれた。これは日本列島の広範囲に広がる有力者の政治連合「ヤマト王権」が現れ、列島中央部の勢力

がその中心の位置を占めたことを示すものと理解されている。

ヤマト王権はその強大な権力構造を、東アジアとの海上交易が行われる時代に、東アジアの国々に対して示す意味があった。『百舌鳥・古市古墳群』は海上交易の窓口であった大阪湾を望む台地の上にあり、大阪湾を行き来する船からは、港に対して長辺を向ける巨大古墳がよく見えたと考えられている。

しかし、東アジアとの交易や文化交流の中で仏教が日本に伝わってくると、巨大古墳が作られなくなり、天皇の陵墓を守る役割は寺院に移っていった。

百舌鳥エリアには、4世紀後半から5世紀後半にかけて、100基を超える古墳が作られたが、その後の都市開発などによって壊され、仁徳天皇陵古墳や孫太夫山古墳、いたすけ古墳など44基のみが残る。構成資産に含まれるのは、その内23基。

一方で古市エリアには4世紀後半から6世紀前半にかけて130基を超える古墳がつくられた。現在は応神天皇陵古墳や津堂城山古墳、白鳥陵古墳など45基が残る。構成資産に含まれるのは、その内26基である。



#### □ 百舌鳥エリアと古市エリア

#### 名称や公開などの課題

宮内庁が管理する歴代天皇や皇后、皇族の陵墓が含まれており、構成資産名や公開について課題も指摘されている。

「仁徳天皇陵古墳」は、「陵」と「古墳」\*が1つになっており、「仁徳天皇陵」であることを譲らなかった宮内庁と、被葬者が特定できていないとする考古学者などとの間の折衷案となっている。世界遺産として「仁徳天皇陵」という名前が出たことで、この古墳に仁徳天皇が埋葬されていると学術的にも特定されているとの誤解を与えかねないとする懸念が、考古学の専門家などから出されている。

また、宮内庁が管理する陵墓は、研究者や一般に対しても公開されていない。今後、考古学的な研究内容と、治定\*との間の見解の違いをどのように埋めてゆくのかも求められている。構成資産の全てが非公開ではなく、古市エリアの藤井寺市にある津堂城山古墳や鍋塚古墳、古室山古墳、大鳥塚古墳などは墳丘に登ることができる。

\*「陵」と「古墳」：天皇や豪族などの埋葬者が明らかな陵墓を「陵」、そうでない古い墳墓を「古墳」と呼ぶ。 治定：古墳に埋葬されている人物を特定すること。

#### ▶ 仁徳天皇陵古墳(大仙古墳)

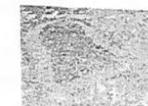
日本最大の前方後円墳。長さ840m(濠を含めた長さで、墳丘のみの長さは486m)で墳丘の周囲を三重の濠が取り囲んでいる。世界三大墳墓の1つに数えられる。大阪湾からの眺めを意識した場所につくられている。

#### ▶ 孫太夫山古墳

仁徳天皇陵古墳の前方部南側に位置する帆立貝形墳。仁徳天皇陵古墳の陪冢と考えられている。長さは65m、後円部の高さは7.7m。

#### ▶ 履中天皇陵古墳(ミサンザイ古墳)

日本第3位の巨大前方後円墳。長さ365m、後円部の高さは27.6m。墳丘からは円筒埴輪、形象埴輪が見つかっている。大阪湾からの眺めを意識した場所につくられている。



#### ▶ いたすけ古墳

長さ146m、後円部の高さは11.4mの前方後円墳。幅が広く、長さの短い前方部の形状が特徴。1950年代に宅地開発による破壊の危機にさらされたが、市民を中心とした保存運動によって破壊をまぬがれた。

#### ▶ ニサンザイ古墳

長さは約300m、前方部の高さは25.9mの日本有数の巨大古墳。墳丘につくられた平坦面から隙間なく並べられた円筒埴輪が見つかっている。

#### ▶ 応神天皇陵古墳(誉田御廟山古墳)

日本第2位の大きさの前方後円墳。長さ425m、後円部の高さは36m。墳丘の体積は国内第1位である。墳丘や濠からは円筒埴輪や形象埴輪が見つかっている。2万本以上の円筒埴輪が並べられていたと推定されている。

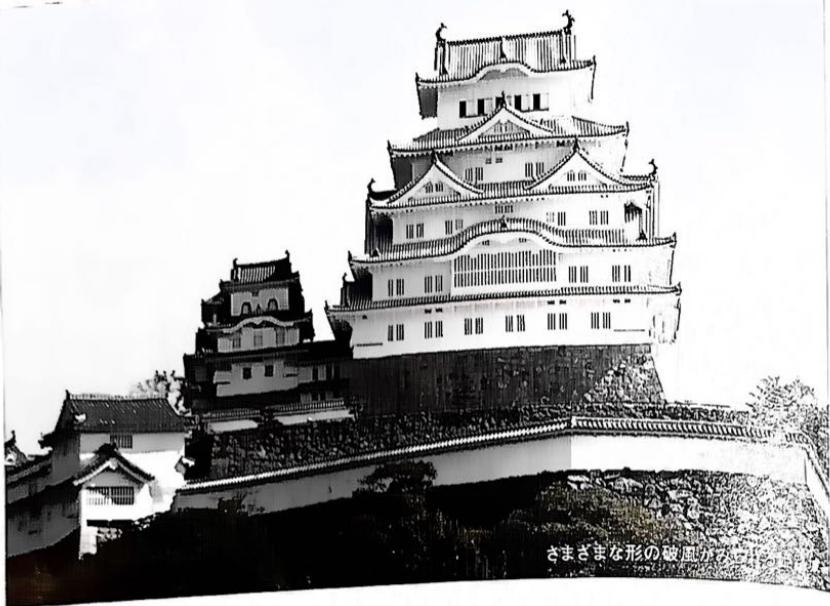


#### ▶ 津堂城山古墳

4世紀後半に築造された前方後円墳。長さ210m、後円部の高さは16.9m。古墳群の中では最初期に築かれたものと考えられており、水鳥形埴輪など珍しい埋葬品も見つかっている。

#### ▶ 仲哀天皇陵古墳

長さ245m、後円部の高さ19.5mの前方後円墳。室町時代に城として使われたため、墳丘の上面は一部の形が変えられている。周囲には幅の広い濠が巡り、堤の上にも円筒埴輪が並べられていた。



兵庫県



## 姫路城

Himeji-jo

登録年 1993年 登録基準 (i)(iv)



### 登録基準の具体的内容

#### ●登録基準(i) :

大天守をはじめとする建造物群のデザインには、木造構造の外側を土壁で覆い、その上に白漆喰を施した簡素な素材の外観に、複雑な構造の配置や屋根の重ね方を組み合わせる独自の工夫が見られる。「白鷺城」の別称が示すように、その美しさは日本の木造建築の中でも最高水準に達し、世界的にも類のない傑作である。

#### ●登録基準(iv) :

日本の城郭建築が最盛期を迎えた17世紀初頭に築かれた姫路城は、天守群を中心とする櫓や門、土塀などの建造物の他、石垣、濠なども良好な状態で保存されており、防御にも創意を凝らした日本独自の城郭構成を表す代表的な建造物である。

### 遺産価値総論

姫路城は、17世紀初頭の日本式城塞建築の中でも、最大の規模と完成度の高さを誇る建造物である。城内には、大名らが自らの権威を示すため、競うように大規模

城郭を築いた戦国時代ならではの様式や意匠などが見られる82の建造物が現存し、このうちの8棟が国宝、残る74棟が重要文化財に指定されている。

外観の美しさだけではなく、建物の配置や、螺旋状に巡らされた曲輪<sup>\*</sup>、3重の水濠など、全体的な縄張<sup>\*</sup>にも難攻不落の砦としての高度な機能性と設計思想

が示されている。敵兵の侵入を防ぐための狭い通路や頑丈な門櫓、櫓や壁に備えられた石や熱湯を敵に注ぐための石落、矢や鉄砲を撃ちかけるための狭間など、随所に防衛のための工夫が凝らされている。

これらの建造物は、一度も大きな戦火に見舞われることなく保存されていることに加えて、17世紀から20世紀にかけて行われた修復作業も、創建当時の技術や意匠を引き継いで実施されている。世界的にも珍しい木造城郭建築の中でも、最も保存状態が良いとされる。

### 歴史

16世紀末、羽柴(豊臣)秀吉は中国地方を治める毛利家攻略の拠点として、古くから西日本における交通の要衝であった現在の兵庫県姫路市に新たな城を築くこと



堀に設けられた狭間

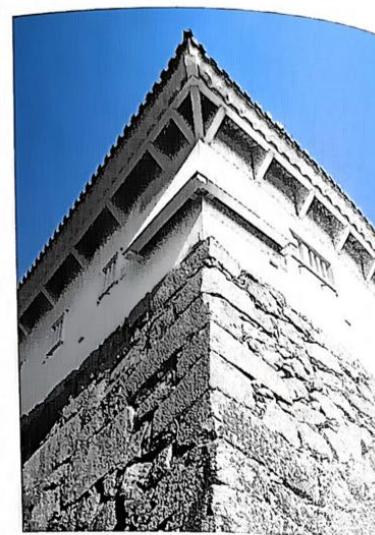
曲輪：城中の建造物のための区画。 縄張：城の設計や構成、仕組みのこと。



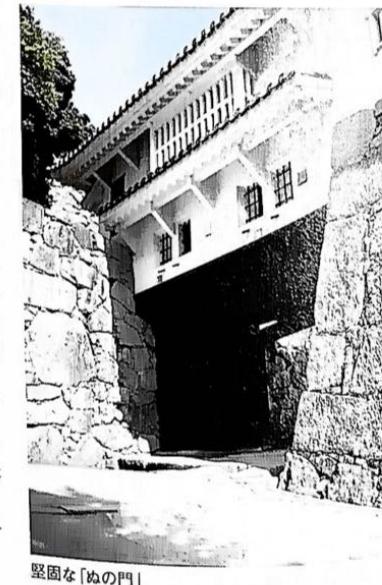
を決めた。当時、姫丘(ひめおか)と呼ばれていたこの地域にあった城郭に、秀吉は1580年に手を加え、3層の天守閣を含む近代城郭とした。1600年の関ヶ原の戦いの後、城主とした。1601年から1609年にかけて姫路城の大改修を実施。姫路城のシンボルである外観5層の大天守をはじめとする天守群や、2重の濠(内濠・外濠)で囲み内郭と外郭を区分する曲輪構成などは、この池田輝政の時代に整備されたもの。1617年に城主となった本多忠政は、長男の忠刻とその妻である千姫の居住の場となる西の丸の整備に着手。周辺には城下町も整備され、姫路城は城主を変えながらも、江戸時代を通じて藩制の中心地としての役割を果たした。

江戸幕府が幕を下ろすと、明治政府は姫路城を軍用地として接収し、新たに陸軍師団司令部施設や兵舎などが置かれた。天守群など内郭の建造物群は保存されたが、修復はされず城内は著しく荒廃した。一時は売却や取り壊しの危機もあったが、1919年の「史蹟名勝天然記念物保存法」によって保存の道が示され、1931年に国宝に指定された。

1934年、豪雨で西の丸の櫓や石垣に大きな被害が生じたことを受け、政府は姫路城の修理計画を立案。工事は太平洋戦争の激化にともない一時中断したが、戦後再開され、二の丸の建造物などが修復された。1956年からは、「昭和の大修理」と呼ばれる、大天守の解体修理を含む大規模な補修工事が行われ、天守群は往時に近い姿を取り戻した。工事の過程で、創建の際に記された多くの銘文が発見され、天守の築造過程が明らかとなつた。2009年からは、5年半に及ぶ天守群の保全修理(平成の大修理)が行われ、漆喰の塗り替えや瓦の全面葺き直しなどが行われた。



石垣の上に設けられた石落



堅固な「ぬの門」

## 保存上の課題など

世界遺産の修復の際には真正性が求められ、ヴェネツィア憲章によって「伝統的な素材や工法を用いること」とされているが、伝統的な技術が不適切である場合には、近代的な構築技術を用いることが許される。姫路城は、築城当初より礎石が天守の重みを支えきれず傾いており、その姿は「東に傾く姫路の城は、花のお江戸が恋しいか」と謡われるほどであった。そのため、「昭和の大修理」の際には礎石が取り除かれ、鉄筋コンクリート製の基礎構造物に取り替えられた。

また、シクロなどの外来植物の繁殖による石垣などの損傷も懸念されている。

### TOPICS

## 構成資産の概要

### ▶ 天守群

天守群は、内郭北東部の最も高い位置に築かれている。唐破風\*や千鳥破風をもつ屋根を5層に重ねた望楼型天守である大天守と、3層の屋根をもつ東小天守、乾小天守、西小天守の4つの建造物を四隅に配置し、それぞれの間を廊下状の櫓(渡櫓)でつないでいる。

### ▶ 西の丸

本多忠政が築いた居住のための曲輪。御殿は現存しないが、化粧櫓\*、長局が残る。長局には丸、三角、四角形など幾何学形状の鉄砲狭間や弓狭間が見られる他、石落や蓋による開閉が可能な隠し狭間なども設けられていた。

### ▶ 備前丸

天守群の南に位置する曲輪跡で、かつては城主の居館である本丸御殿が存在した。これらの建造物は1882年に発生した火災で焼失したため、現在は空き地になっている。

### ▶ 通路

城内の通路は、天守群に向かって次第に高くなるよう区画されており、城の防御を高める効果をもたらしていた。それぞれの区画の境には土塀が築かれ、要衝に門櫓などを置くことで、多数の敵兵の侵入を阻む構造になっていた。

破風：屋根を合わせた妻側の造形。屋根が三角のものを千鳥破風、曲線のものを唐破風、入母屋屋根につけるものを入母屋破風と呼ぶ。 化粧櫓：千姫が男山の天満宮を遙拝する際に化粧を直した場所。